

愛媛県西条市・宮之内遺跡と出土舍利容器をめぐる

松葉竜司

1 はじめに

国営ほ場整備事業(道前平野農地整備事業)に伴い発掘調査が実施されている愛媛県西条市・宮之内遺跡では、令和5年(2023)10月に県内で類を見ない金銅製の舍利容器が出土した。地域住民・愛好者に対して令和6年(2024)3月と令和7年(2025)2月に8日間ほど展示公開したところ、1,000人を越える見学者があり、地元報道機関のニュース、新聞等でも報じられるなど、大きな反響があった。また、発見後に公益財団法人元興寺文化財研究所に委託して実施したX線CT撮影、蛍光X線分析や繊維片同定等の理化学分析、クリーニングや樹脂含浸・塗布などの保存処理、三次元計測や実測図作成、微細部観察等の諸記録作成などを通じて、多くのことが判明してきている。

宮之内遺跡の発掘調査は当面続く予定で、発掘調査報告書の刊行時期の具体的な目処も立っていないため、本稿では資料紹介をおこなった上で、舍利容器が出土した背景、遺跡の性格について概述するとともに、舍利容器に対しても一定の評価をおこなうものである。

なお、この舍利容器の概要を公表したものとして、展示公開時の配布資料(愛媛県埋蔵文化財センターホームページからダウンロード可能)と、年報『愛比売』令和5年度の調査概要(松葉2024a)、令和6年9月30日発行『考古学研究』で取り上げられた資料紹介(松葉2024b)がある。併せて参照されたい。

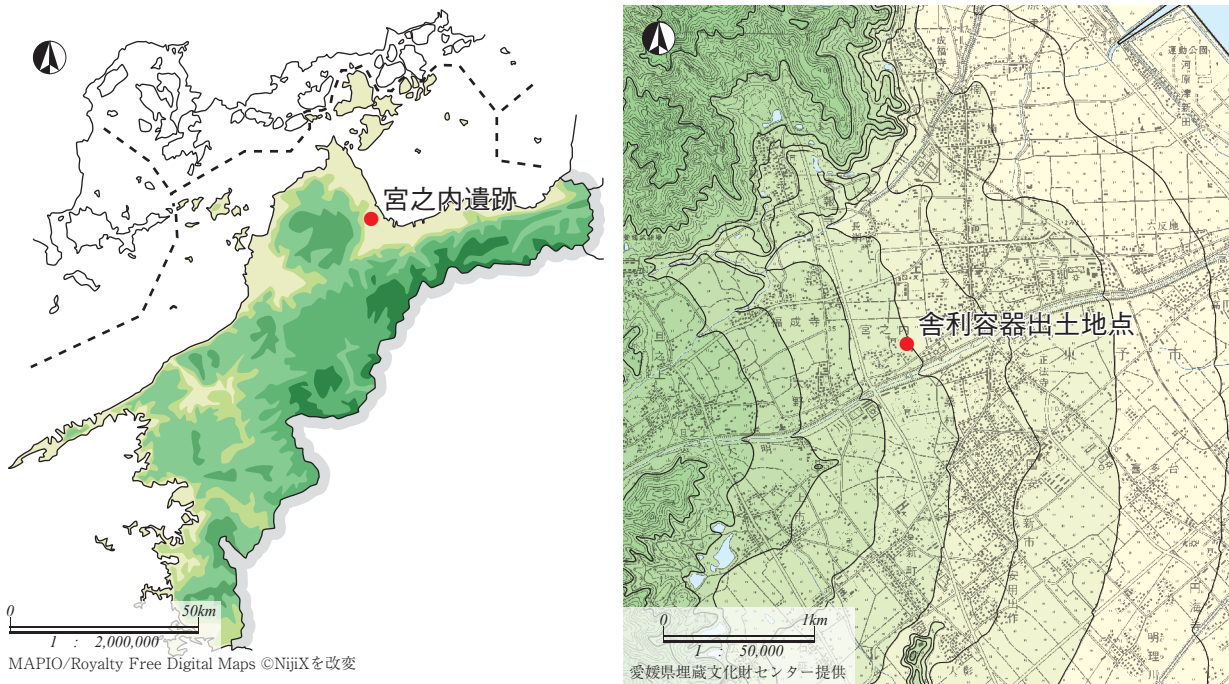


図1 宮之内遺跡位置図

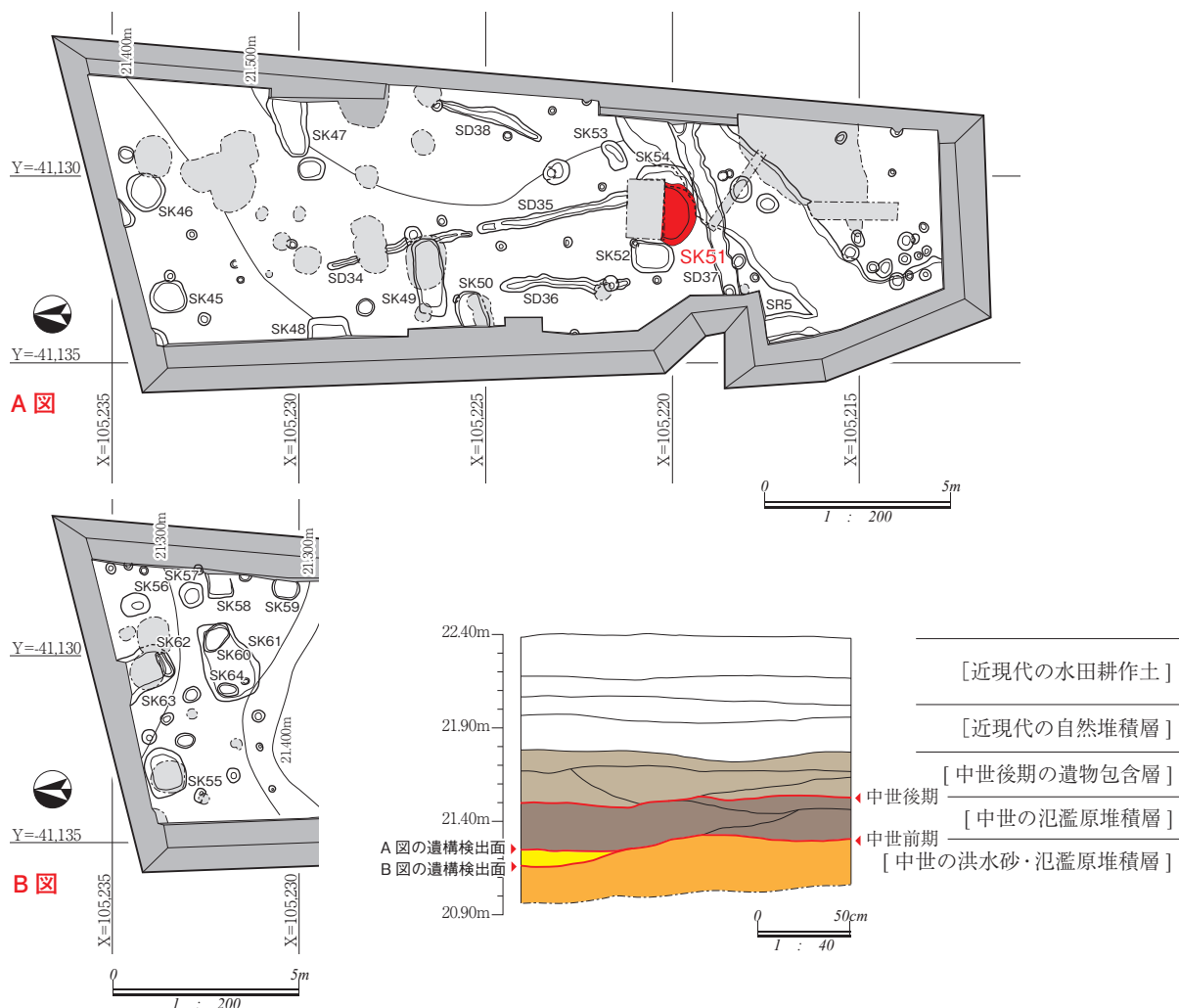
2 宮之内遺跡と舍利容器出土遺構の概要

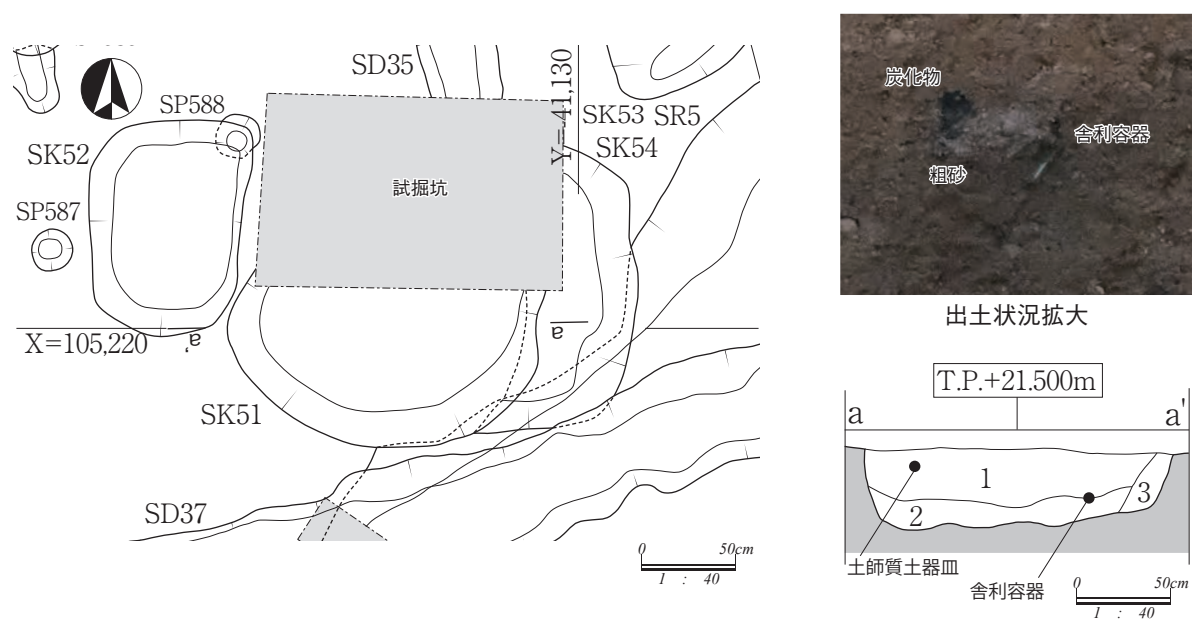
宮之内遺跡は愛媛県西条市宮之内に所在する。高縄山系の東三方ヶ森を水源とし、道前平野北部の周桑平野を貫流する大明神川の中流域、左岸扇状地に立地する(図1)。この大明神川の上・中流域は、「庄々所済日記」(安楽寿院文書)に仁平2年(1152)の設置が知られ、もとは皇室領荘園であった吉岡荘の比定地となっており(山内1986)、遺跡は郷社・宮内神社の北側に広がっている。

西条市教育委員会の試掘調査によって宮之内遺跡では古代から中世を中心とした遺構・遺物が確認されており(西条市教育委員会2020)、令和4年度からは場整備に伴う記録保存の発掘調査が継続的におこなわれている。これまでの調査では、7世紀から古代にかけての竪穴建物跡・掘立柱建物跡なども検出されているが、中世の土坑、小穴、溝、自然流路などが多く、特に中世後期の遺構・遺物が多くの調査地点で確認されている(松葉2024a)。

舍利容器が出土した6a区下層面は氾濫に由来する極粗砂の堆積からなるが、調査区の北端付近では上下で遺構の重複が見られるなど、短期間のうちに遺構の構築と氾濫による流失が幾度か続くような不安定な氾濫原性の低地面である。

6a区下層面の検出遺構は、自然流路1条、溝5条、土坑20基、小穴65で(図2)、中世前期、13～14





[MYU6a区 SK51]

層名	色 調	Munsell	土 質	粘性	粒度	緊密度	備 考
1	暗褐	10YR3/3	シルト	弱	細	中	炭化物混じる
2	黒褐	10YR3/2	シルト	弱	細	中	
3	暗褐	10YR3/4	細砂混じりシルト	なし	粗	中	

図3 宮之内遺跡6a区土坑51(SK51)平面図・土層断面図

世紀に伴う瓦器、土師質土器、瓦質土器などの破片が出土している。

土坑51(SK51)は平面形が角張った円形を呈し、一辺1.6m、残存深0.43mを測る(図3)。土坑の北側は試掘坑によって失われ、南半のみが残存する。土坑の検出面付近の埋土から土師質土器杯3点が出土した(図4 1-3)。1・2は胎土が酷似するなど同一個体の可能性があり、1は口縁部が開き、2の外部底面に回転ヘラ切り痕が残る。3は口縁部がやや立つ。これらの杯の帰属年代は判然としないが、後述する炭化物の下限年代も参考に、13世紀後半から14世紀までの幅で理解しておく¹。

舍利容器は底面から10cmほど上から、やや東に傾き、容器の一部が破損した状態で出土した。周囲の土質は粗砂質で、舍利容器を砂が入る布袋状のものに入れたか、砂と一緒に裂に包んだ状態で土坑底面付近に埋納した状況が想定される。

図4-4の炭化物は舍利容器とともに出土したもので、株式会社パレオ・ラボに委託した炭化物の樹種同定、放射性炭素年代測定(AMS法)により、アカガシ亜属の炭化材で、1297-1327 cal AD (41.06%) および1344-1395 cal AD (54.39%)と、下限が13世紀末～14 世紀末の暦年代を示すことが判明した。

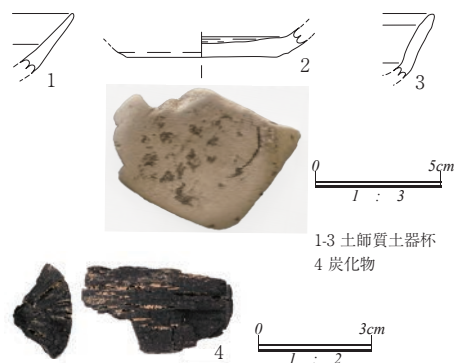


図4 土坑51(SK51)出土遺物実測図

3 宮之内遺跡出土の舍利容器の概要

(1) 舍利容器

肉眼観察やX線CT撮影画像、蛍光X線分析などからあきらかになった内容も踏まえて、舍利容器の形態、法量、構造、材質、製作技術などについて概観する。

形態・法量

五輪塔形を呈するが、五輪塔としてはいびつで変則的、どちらかと言えば宝塔に近い形態をもつ。下から地輪、水輪、火輪、空輪、風輪と五輪の各部を認識できるものの、火輪部と地輪部が極めて低く、水輪部が縦長でやや張り、卵形を呈する。X線CT画像・実測図等をもとに法量を

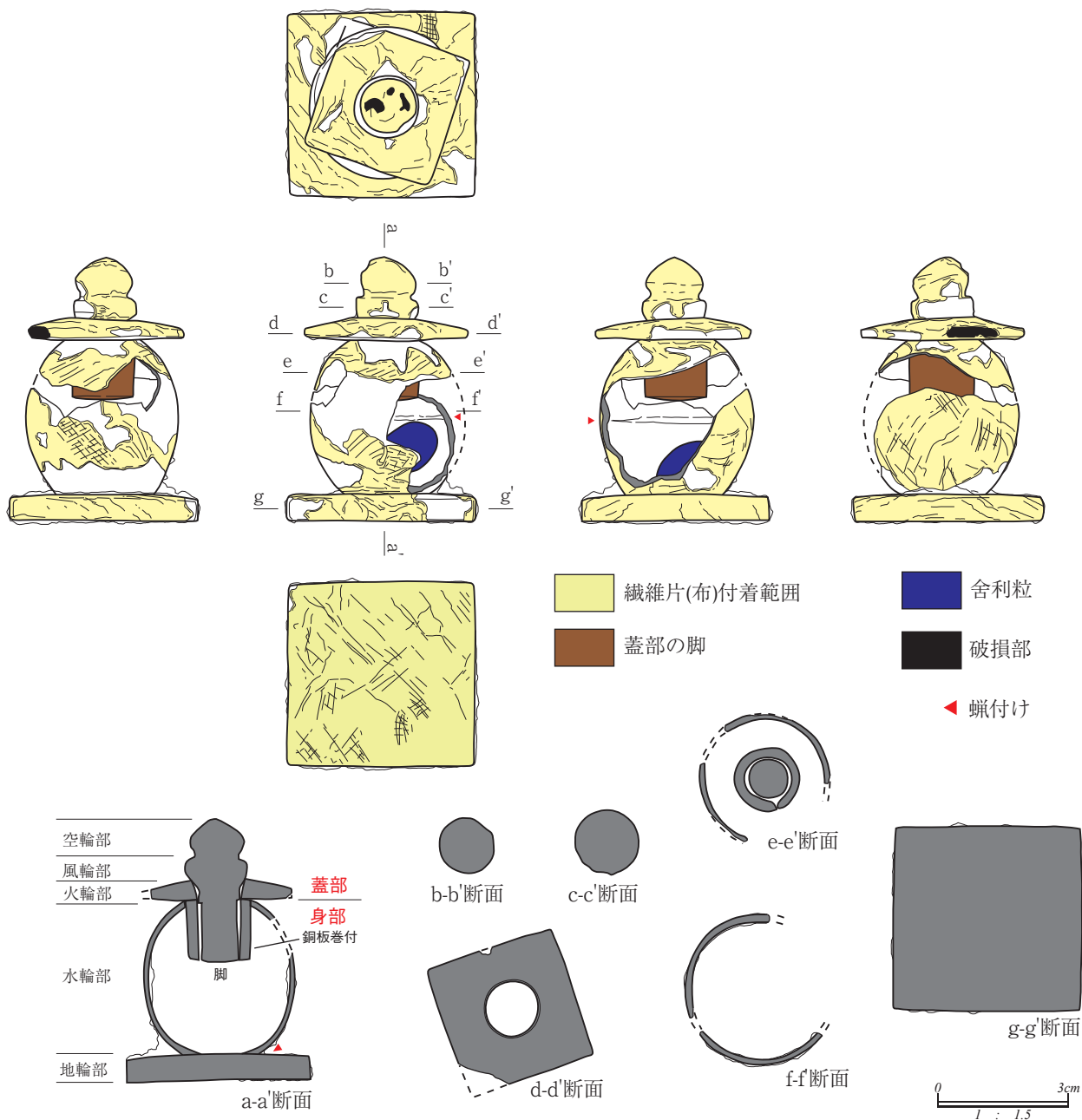


図5 金銅製舍利容器実測図

復元すると、総高27.5mm、空輪部高4.0mm、同幅6.0mm、風輪部高2.5mm、同幅6.5mm、火輪部高2.5mm、同幅13.5mm、水輪部高15.5mm、同幅15.5mm、地輪部高2.8mm、同幅19.0mmを測る(保存処理後の計測値)。

構造

水輪部より下は舍利粒を納めた身部、火輪部より上は蓋部とする。写真1上段に示すとおり、空風輪部と風輪部下部から伸びる8mmほどの脚までを一つに造る。火輪部は扁平で低い屋根形を呈し、中央に孔がある。風輪下部の脚がこの孔を貫き、火輪下部で固定することで舍利容器の蓋部とする。水輪内部に直接舍利粒を納めて容器とする。地輪部も火輪部と同様に扁平で、舍利容器の部材の中で最大幅となり、容器の台となる。

容器基部の地輪部と蓋部の火輪部は並行する位置で収まるのが正位であるが、出土時の状態は地輪部に対して火輪部は17度ほどの斜角となり、納置時には蓋部が斜めに嵌っていたものと想定される(図5)。

材質

容器外面の地金、鍍金と考えられる箇所などで蛍光X線分析をおこない、舍利容器の構成元素が判明した²⁾。

舍利容器の各部、火輪直下の脚に巻き付く板材などの地金部分から銀(Ag)や金(Au)、鉛(Pb)を含む銅が検出された。材質は銅と鉛の合金と考えられるが、少量の鉛を加えると銅をより簡単に加工できる特性を利用したものと考えられる。

容器外面の鍍金と考えられる箇所から金および水銀(Hg)が検出された。図6の三次元モデルで示したように、舍利容器の蓋部・身部ともに外面には鍍金が施され、もともと金色に輝いていたものと思われる。一方、水輪内部、蓋部内部となる風輪下部の脚と巻き付く板材のいずれにおいても鍍金は確認できない。

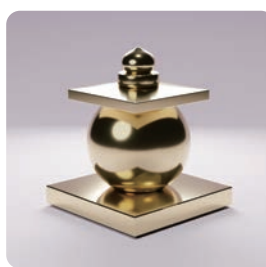
製作技術

空風輪部と風輪部下部の脚を一体で造るが、鑄造したか、棒状のものを研磨して整形したか、はっきりしない。縦5.7mm、横18.8mm、厚み



写真1 金銅製舍利容器X線CT画像

1.1mmほどの銅板を脚に巻き付けて留めるが、脚と銅板の間に金属物質による蝨付けの痕跡は確認されないので、有機質を用いて接着された可能性が高い。巻き付く銅板の外径と水輪部上端の孔の内径は同径で、蓋部は容器から脱着できる栓の役割を果たしたものと考えられる。



縮尺任意



図6 金銅製舍利容器三次元モデル

火輪部はX線画像に銅板折り曲げの痕跡は認められないので、数mmほどの銅板を研磨して屋根状に整形した後、上方から中央に孔を設けたものと考えられる。

水輪内部の上下真ん中付近の地金からは他では認められないスズ(Sn)が検出され、鉛の強度も強いので、水輪部は2つの半球体のものをスズで蝨付けして上下に接着したものと考えられる(写真1下段)。なお、この接合箇所は上下ともにやや肉厚で、接着強度を高めるために端部を厚くして接着面積を確保したものと推察される。おそらく同じ型を用いた鋳造で、水輪部の半球部分を二つ造り、外面を研磨して薄くし、頂部の湯口を利用して、水輪上半は蓋部を嵌めるために孔を広げ、水輪下半は地輪部の上面と接着するために平らに研磨したものと考えられる。

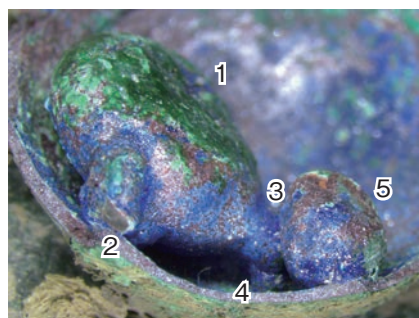
地輪部にも銅板の折り曲げ痕跡は見られず、銅板の研磨によるものであろう。水輪部と地輪部の境にX線吸収が強い面が観察されたので、金属物質により蝨付けされたものと推定される。

(2) 舍利粒

赤・青・緑色を呈し、錆びで覆われているが、水輪内部の底には釈迦の遺骨に見立てた舍利と



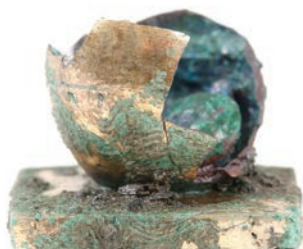
上半部(保存処理後)



舍利粒拡大(保存処理前)



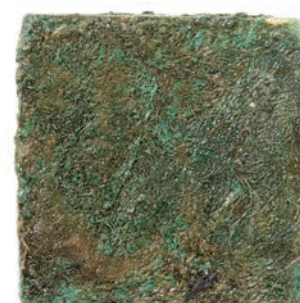
下半部・上から(保存処理後)



外面下半部(保存処理後)



内面下半部(保存処理後)



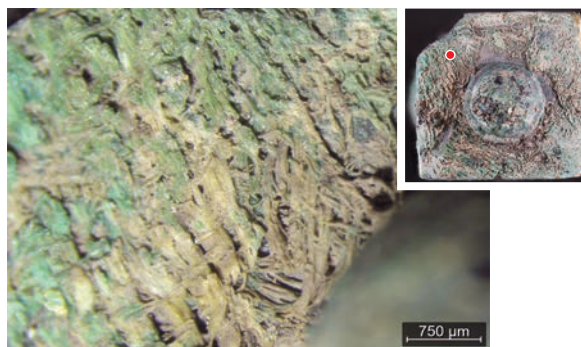
底面(保存処理後)

写真2 金銅製舍利容器写真(縮尺約2倍)

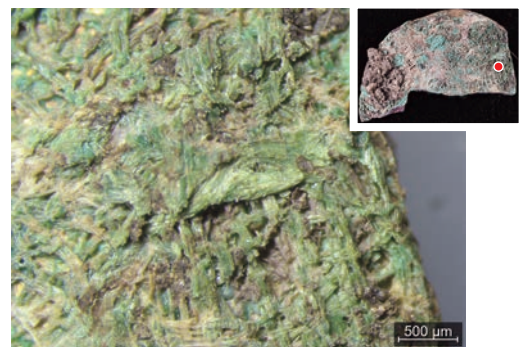
考えられる金属粒が5粒確認された。粒1(写真2上段中央の写真中の番号と対応。以下、同じ。)の法量は長半径3.5mm、短半径1.5mmほどで形状は扁球に近い。粒4は1mmほどの球状を呈し、粒5は長半径1.5mm、短半径1mmほどと長球に近い形状である。

粒1は銅、スズ、鉛が検出され、青銅と考えられる。粒2は主として銅、鉛が検出され、スズは検出されなかった。腐食により粒1から溶け出した成分が固化した腐食生成物である可能性がある。粒3・4・5からは粒1と同じく銅、スズ、鉛が主に検出され、青銅と考えられる。粒3は粒1と結合するが、結合部より先端部の方がX線吸収が強く、先端部を別個体とした場合、約1mmの球状となり、別個体の可能性が想定される。また、粒4と5からは粒1と3では検出されないヒ素が検出されたため、粒1・3と4・5は別に造られた可能性が高い。以上のことから、青銅製の舍利は3～4粒納められたと考えられる。

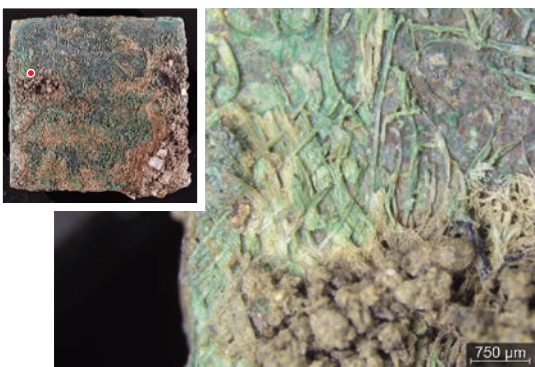
舎利の粒1・5の表面で観察された微小な透明物質は、鉛の検出強度が著しく高いため、舎利容器や舎利から溶出した鉛成分が固化したものと推定される。



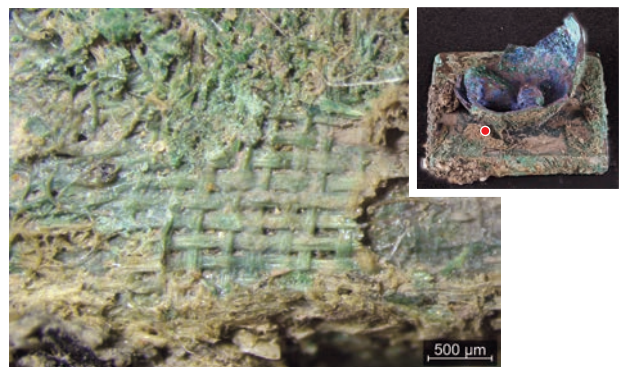
織物1と織物2の重なり部分(火輪部上面)



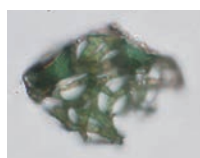
水輪部外面に付着する紐



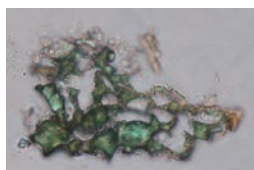
織物1(地輪部底面)



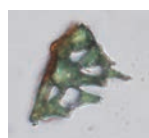
織物2(地輪部上面)



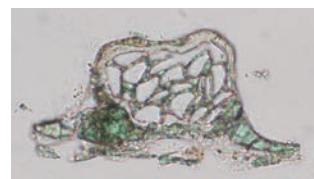
織物1 経糸断面観察像



織物1 緯糸断面観察像



織物2 経糸断面観察像



織物2 緯糸断面観察像

0 20.0 μm

写真3 舎利容器付着織物・紐写真

(3) 舍利容器外面付着の織物・紐

舍利容器の外面には織物1、織物2、紐の3種類の有機質が確認されている(写真3上・中段)。図5の実測図で示すとおり織物は舍利容器の外表面全体に付着する。織物の上下関係がわかる箇所はほとんどないが、一部で織物1の下に織物2があることが確認された。また、紐は水輪部の織物の上で観察される。容器外面の全体に小さい植物性の炭化物が付着する。

織物1は経糸と緯糸の太さが大きく異なり、太い方が幅300 μ m、細い方が幅80 μ mほどである。ともに撚りはほとんどかかっておらず、織密度はともに約30/cmである。残存状況が悪く、織組織はあきらかではないが、綾織りの可能性が高い³。織物2は平織りで、糸の幅は経緯ともに約100 μ m、織密度は約60/cmである。経糸、緯糸ともに撚りはほとんどかかっていない。紐は1か所で確認されたのみで、幅約180 μ mの糸2本を撚り合わせた双糸と考えられる。

双方の織物種を同定するため、水輪部のごく一部の織物を採取して、透過光観察(写真3下段)と落射光観察をおこなったところ、織物1・2の経糸、緯糸のいずれの断面観察像において径約10 μ mの丸みを帯びた三角形が観察され、織物1・2ともに絹製であることが判明した。

無撚りの2種の絹布の重なりが想定され、表地が綾織り、裏地が平織りであるとすれば、布袋または縫い合わせた布裂であったものと考えられ、水輪部で確認されたように容器の真ん中あたりを外から紐で縛った可能性がうかがえる。

表地には綾や錦のように文様を織り出していたことも考えられ、装飾を伴う絹布であった可能性も考えられる(沢田2004・京都国立博物館2010)。正安4年(1302)完成と知られる西大寺本堂の文殊菩薩像内から水晶製五輪塔形舍利容器などとともに舍利を包む錦裂が発見されており、具体的にはこのようなものが想定される(奈良国立博物館2001)。

4 金属製五輪塔形容器の諸例とその評価

(1) 概要

各地の寺院や石製塔などに納置されて伝世する金属製の五輪塔および同形の舍利容器、蔵骨器などの存在が知られている。石製塔からの不時発見や遺跡出土のものも散見され、このような金属製の五輪塔などと報告されるもののうち、古代末から中世に伴うものとして管見に触れるだけで37例ほどが知られる(図7・表1⁴)。信仰の対象物として伝世するものも多く、その性質上、積極的にX線透過撮影やX線CT撮影、蛍光X線分析等がおこなわれたケースは少なく、材質や内部構造が判然としないものも多い。一口に五輪塔として報告・紹介されている資料の中には舍利容器や蔵骨器などとして使用されたものも一定数存在するように思われる。厳密には、高僧の遺骨、歯などを納めた蔵骨器と鉢物などを舍利粒に見立て納めた舍利容器は区分して考える必要もあろうが、本稿ではこれらを「金属製五輪塔形容器」と一括して総称し、網羅的に集成した。

ここでは、各地の金属製五輪塔形容器のあり方を概観し、それらと比較することで、宮之内遺跡出土舍利容器の特徴や年代などを検討しておきたい。

(2) 金属製五輪塔形容器の系統

法量、構造、製作技術等をもとに、それぞれを1～5の系統に分類し、概要を把握する。

系統1

表1の9・14・18・32は銅または金銅製の三角五輪塔。火輪部を三角錐形に造る。

9は総高39.0cm、金銅製(図8-1)。胡宮神社に伝わり、寄進状により建久9年(1198)に重源が敏満寺に施入したことが知られる。地輪から風輪までの各輪部を個別に鑄造し、内部でかしめ留める。地輪部は上部が合わせ蓋、下部が箱となり、内部に金銅製請鉢と水晶製舍利容器を納める。

14は銅製。醍醐寺円光院跡の石櫃納置のもの。史料に発見が知られるのみで、詳細は不明であるが、史料に見られる帰属年代は応徳2年(1085)と古い。

18は総高44.5cm、金銅製。東大寺に伝わる。数枚の銅板を折り曲げて鑲付けして造るとされる。刻銘により舍利容器が永祿12年(1569)、塔が天正14年(1586)に伴うことが知られる。重源が東大寺浄土堂に舍利3粒とともに金銅五輪塔を施入したことが『南無阿弥陀仏作善集』に知られ、永祿10年(1567)の兵火で焼失した後に造られた新しいものである。

32は総高38.5cm、金銅製。浄土寺に伝わる。銀製蓮華形の舍利容器を伴う。構造等は不明。

9・18・32は総高40cm前後の大型品で、同形態である。地輪内部に別の舍利容器を納め、地輪上部を合わせ蓋として五輪塔そのものを外容器の蓋と見立てている。18は16世紀後半の復元品であるが、その他は11～12世紀に伴う。敏満寺、浄土寺は重源の別所であり、系統1は重源と関係が深い寺院に施入されたものである。水晶製三角五輪塔の事例として、建仁2・3年(1202・1203)

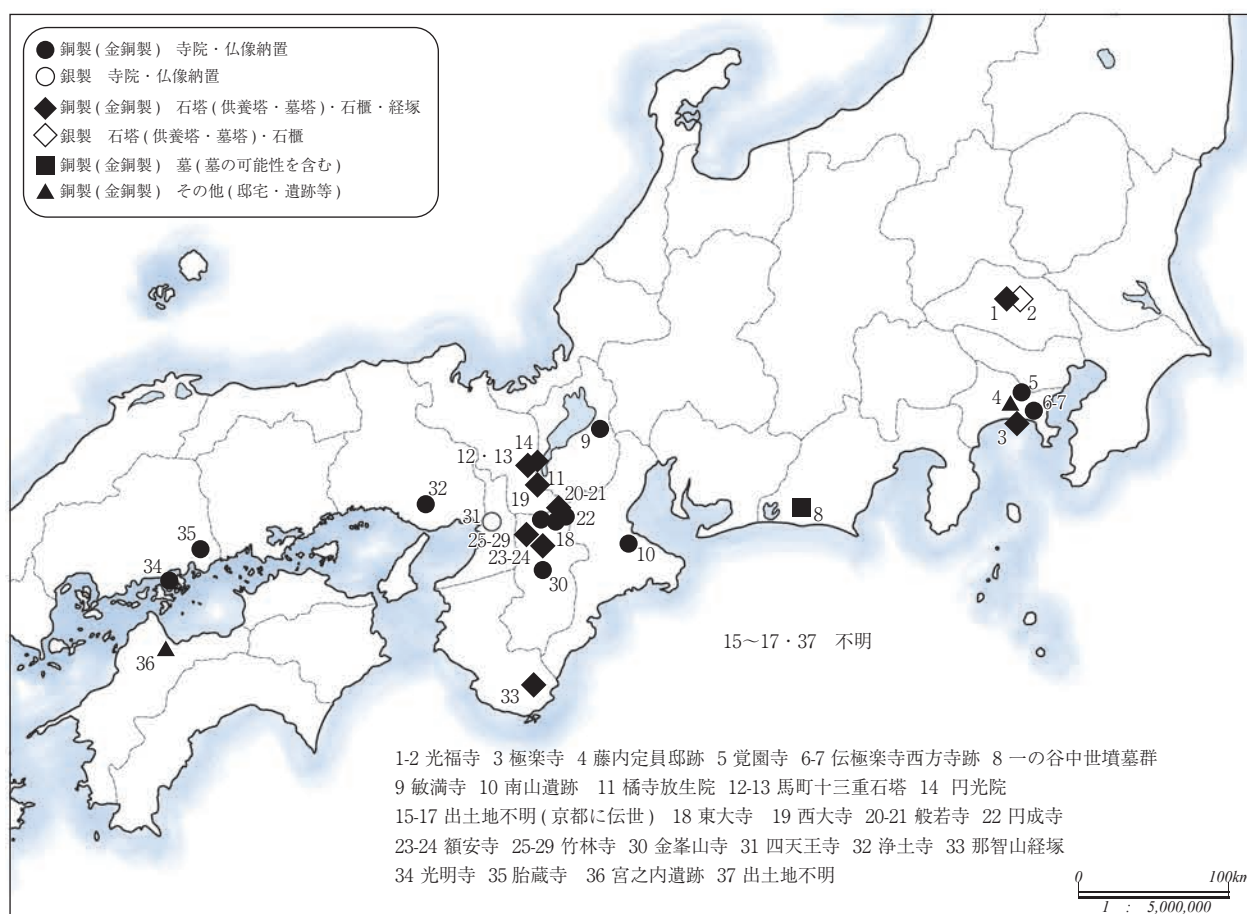


図7 出土・伝世の金属製五輪塔形容器の分布

表 1 金属製五輪塔形容器一覧表

	所在地	名 称	遺跡・埋納・納置場所ほか	法 量 (cm)	材質	年 代
1	埼玉県東松山市	銅製五輪塔	光福寺 石製宝篋印塔	総高32	銅	納置は元亨3年(1323)
2		銀製五輪塔カ			銀カ	
3	神奈川県鎌倉市	金銅五輪塔	極楽寺境内 石製五輪塔(順忍塔)	総高190	金銅	納置は延慶4年(1311)
4		銅製五輪塔	小町1丁目309番5地点 第5方形堅穴建築址覆土	現存高25	銅	14～15世紀初頭カ
5		銅製五輪塔	覚園寺 開山塔(石製宝篋印塔石室)	総高100、地輪部幅43	銅	元亨3年(1323)
6		銀製五輪塔	伝・鎌倉市極楽寺西方寺跡出土	総高212、地輪部幅79、地輪部高63	銀	鎌倉(14世紀)
7		銅製五輪塔		総高165、地輪部幅45	金銅	鎌倉末(14世紀)
8	静岡県磐田市	銅製舍利五輪塔	一の谷中世墳墓群 13号火葬遺構出土	総高295	銅	13世紀後半～14世紀カ
9	滋賀県大上郡 多賀町	金銅三角五輪塔	敏満寺	総高390	金銅	建久9年(1198)
10	三重県松阪市	銅製五輪塔	南山遺跡	総高31、火輪部高26、火輪部幅31、水輪部高14、 水輪部幅28、地輪部高22、地輪部幅34	銅	14世紀カ
11	京都府宇治市	金銅五輪塔	橘寺放生院 浮島石製十三重層塔	総高161	金銅	塔は弘安9年(1286)
12	京都府京都市	金銅五輪小塔	馬町石製十三重塔	総高33	金銅	納置は永仁3年(1295)カ
13		金銅五輪小塔		総高37	金銅	
14		銅製三角五輪塔	上醍醐円光院跡 石櫃	不明	銅	応徳2年(1085)
15		金銅五輪塔	不明	総高200、地輪部幅85	金銅	鎌倉末
16		金銅五輪塔		総高175	金銅	鎌倉前半
17		金銅五輪塔		総高1456	金銅	鎌倉中期
18	奈良県奈良市	金銅三角五輪塔 (付金銅舍利容器)	東大寺	総高445	金銅	舍利容器は永禄12年(1569) 五輪塔は天正14年(1586)
19		金銅八角五輪塔	西大寺 木造興正菩薩坐像内	総高91	金銅	文永7年(1270)
20		金銅五輪塔	般若寺 石製十三重塔	総高57	金銅	塔は建長5年(1253)頃
21		金銅舍利塔		総高100	金銅	
22		金銅五輪塔	円成寺 聖徳太子像内	総高35	金銅	鎌倉(延慶2年(1309)カ)
23	奈良県大和郡山市	銅製鍍金五輪塔形骨蔵器	額安寺 石製五輪塔(忍性塔)	総高86	金銅	14世紀
24	奈良県大和郡山市	銅製鍍金五輪塔形骨蔵器		総高68	金銅	14世紀
25	奈良県生駒市	金銅製五輪塔形蔵骨器	竹林寺 石製五輪塔(忍性塔)	総高69	金銅	13～14世紀
26		金銅製五輪塔形蔵骨器		総高94	金銅	13～14世紀
27		金銅製五輪塔形蔵骨器		総高85、地輪幅37	金銅	13～14世紀
28		金銅製五輪塔形蔵骨器		総高66	金銅	13～14世紀
29		金銅製五輪塔形蔵骨器		地輪部幅15	金銅	13～14世紀
30	奈良県吉野郡 吉野町	金銅有頸五輪塔		総高47	金銅	鎌倉
31	大阪府大阪市	銀製六角五輪塔	四天王寺	塔総高101、金銅外容器総高209	銀	鎌倉
32	兵庫県小野市	金銅三角五輪塔	浄土寺	総高385	金銅	鎌倉(12世紀)
33	和歌山県東牟婁郡 那智勝浦町	金銅五輪塔	那智山経塚	現存高30	金銅	平安後期(12世紀)
34	広島県尾道市	金銅有頸五輪塔形舍利塔	光明寺(光明坊)	総高65、舍利容器高22	金銅	平安末～鎌倉カ
35	広島県福山市	金銀銅製五輪塔形舍利容器	胎蔵寺	総高73、地輪幅27	金銀銅	貞和3年(1347)
36	愛媛県西条市	金銅五輪塔形舍利容器	宮ノ内遺跡6a区	総高275、空輪部高04、同幅06、風輪部高025、同 幅065、火輪部高025、同幅135、水輪部高155、同 幅155、地輪部高028、同幅19	金銅	13世紀初頭カ
37	不明	金銅五輪塔	不明	総高144、基台幅84	金銅	

性 格	銘 文	文献等	備 考
石塔/納置	石製宝篋印塔に元亨3年(1323)の銘	文献3・7・10・16・20	舍利10粒カ。重要文化財。2・銀製と同一の可能性もあり。
		文献3・10	『武蔵国比企郡岡郷光福寺宝篋印塔之記』に水晶製とともに舍利35粒を伴う銀製五輪塔出土の記載あり。
石塔/納置	地輪部に延慶4年(1311)の銘	文献5・16・19・20・21	
邸宅カ		文献11・12・19	
石塔/納置	五輪塔に元亨3年の(1323)銘 元亨三年三月十九日/右為信阿聖靈也/孝子光広敬白	文献16・19・20	火輪下部に円筒を付け、水輪部にはめ込む構造。
寺院/納置		文献2・4・10・16・19・20	文献4・10には銀製とある。
寺院/納置		文献4・10・16・19・20	火輪下部に円筒を付け、水輪部にはめ込む構造。 文献4には銅製・総高16.5cmの記載、文献10には金銅製の記載あり。
中世墓		文献15・16	
寺院/納置	奉施入近江国敏満寺本堂/金銅五輪宝塔を基於其中/奉安置仏舍利式粒之状如件/ 建久九年戊午十二月日/造東大寺大和尚南無阿弥陀仏記(寄進状)	文献4・10・17・18・20	重源の施入品。
中世墓カ		文献6・8・9・16	空風輪部欠損。火輪頂部に孔。地輪部上面・水輪部全面、火輪部下面を研磨。
石塔/納置		文献10・17	水輪部は水晶製舍利容器。重要文化財。
石塔/納置	石塔に永仁3年(1295)の銘	文献1・10	南塔に納置。
		文献1・10	南塔に納置。水輪部に銀製円筒形舍利合子を納置。
蔵骨器/納置		文献19	慶長11年(1606)に中宮賢子の蔵骨器(石櫃)から出土したことが『醍醐寺新要録』巻三「円光院篇」に記述あり。
不明		文献4・10・16・20	左京区梶井町。各輪に梵字を彫刻。 水輪内部に水晶製五輪塔形舍利容器を納置。
不明		文献10	地水火輪部は鍛造、風空輪部は鋳造
不明		文献10	
寺院/納置	[底裏刻銘] 東大寺浄土堂、本願真也上人、天正十四年丙戌七月十五日、 後藤清左衛門、作者、善宗敬白 [舍利容器銘文] 御舍利殿、東大寺浄土堂、永禄十二年己巳七月十五日、 餅飯殿、銀屋、吉正作	文献4・10・17・18	焼失資料は重源の施入品。
寺院/納置		文献4・10・16・17・21	水輪部に舍利を納める。 13世紀後半(1278・1280年)の納入経あり。
石塔/納置		文献16・17・21	納入品の宋版細字法華経外箱に建長5年(1253)の墨書納入記あり。
		文献16・17・21	納入品の宋版細字法華経外箱に建長5年(1253)の墨書納入記あり。 水輪部は水晶製。
寺院/納置	納入経巻に延慶2年(1309)の銘	文献10	火輪頂部から舍利孔。舍利2粒。
石塔/納置		文献21	
石塔/納置		文献21	
石塔/納置		文献21・22	文献22の図18-21に該当。陶製蔵骨器の追葬。
		文献21・22	文献22の図18-31に該当。陶製蔵骨器の追葬。
		文献21・22	文献22の図16-11に該当。墓壙西南隅の追葬に伴う。
		文献21・22	文献22の図20-21に該当。 石櫃北辺部と東北部の頂部に追葬された埴室出土。
		文献21・22	文献22の図16-71に該当。墓壙西南部に追葬。
寺院/納置		文献4・10	附一、仏舍利 一粒 一、包紙 一紙。 文永11年(1272)の奥書をもつ経巻、印仏などとともに納置。
寺院/納置		文献4・10・14・17	水輪部のみ水晶製。
寺院/納置		文献4・10・17・18・20	重源が施入カ。地輪内部の舍利容器は水晶製で球形。重要文化財。
修法		文献13	
寺院/納置		文献4・10・16・17・20	県指定重要文化財。
寺院/納置		URL1	舍利2粒。錦袋入り。
不明		文献23・24	
不明		文献4	文献4の64に該当。水輪部は水晶製。11の五輪塔と同型式。

頃に重源が創建した伊賀別所の新大仏寺阿弥陀如来立像納置品がある(奈良国立博物館2006)。

系統2

表1の11・21・31・37は金銅製の五輪塔形舍利容器。19は水輪部が銅製、その他は水輪部が水

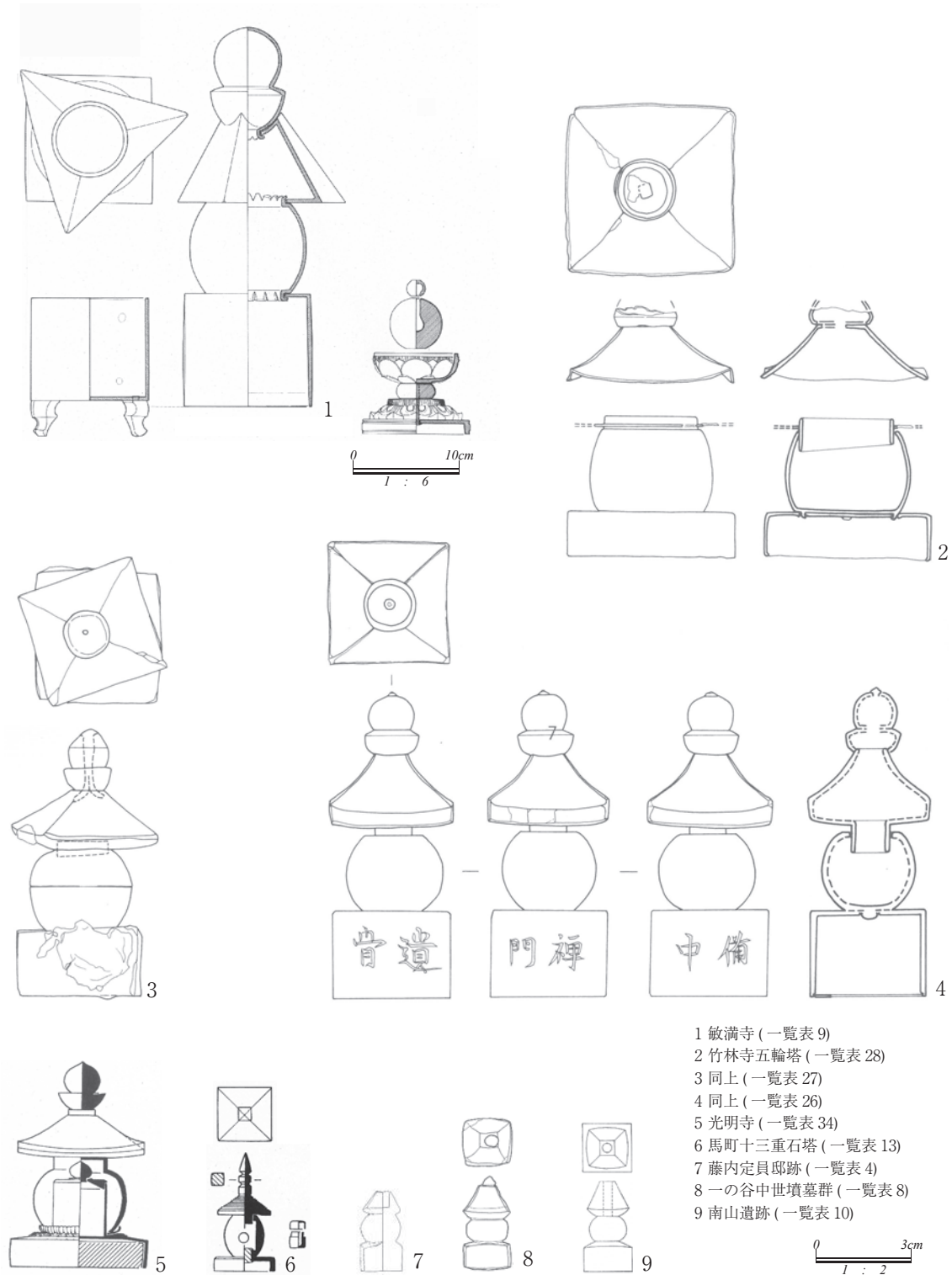


図8 金属製五輪塔形容器実測図

品かガラス製。装飾性が高く、地輪部や水輪部の平面観が多角形をなすものも見受けられる。

11は宇治川の浮島に立つ石製十三重塔に納置され、宝暦年間の洪水で倒壊した際に水晶製六角五輪塔、金銅製の筒形舍利容器・舍利瓶・蓮台形舍利容器などと出土した金銅五輪塔。塔に弘安9年(1286)の銘があり、納置品はいずれも鎌倉時代、13世紀末葉に伴う。11は総高16.1cm。火輪部外面に尾根が表現され、水輪部の四方を面取りして丸窓を開け、中に蓮華座を設けて水晶製宝珠形舍利容器を納める。水輪部と火輪部で分かれ、水輪部が容器となる。

19は西大寺愛染堂の木造興正菩薩觀尊坐像の胎内から発見された八角形五輪塔。総高9.1cm、金銅製。仏舍利安置状により文永7年(1270)の製作と知られる。各部を個別に鋳造で造り、地輪部と水輪部、火輪部と空風輪部を接合して上下に分け、円形木片で両者を嵌めて固定する構造。地輪、水輪、火輪の各部は八角形をなす。水輪部に舍利を納める。

21は般若寺十三重塔の納置品。総高10.0cm、金銅製。地輪部は側面に格子間を、上面に蓮華座を設けて水輪部を載せる。宋版細字法華經の外箱に建長5年(1253)の墨書銘がある。

31は四天王寺に伝わる六角五輪塔。総高10.1cm、銀製。地輪部と水輪部が六角形をなし、装飾性が強い。ガラス製の水輪部以外は銀製で、銀板の鍛造と蠟付けで造るとされる。

37は総高14.4cm、金銅製。来歴等は不明。

11・37は水輪部に窓枠があり、中に舍利容器を納める構造で、21・31は地輪部上面と火輪部下面を何らかの方法で固定する。地輪部や火輪部の側面に透かし彫りや線刻が見られる。19は水輪部も金銅製であるが、地輪部が31と同様に八角形で、地輪部外面の装飾性が高い。

系統2は13世紀に伴うとされるもので占められる。重源が建久8年(1197)に東大寺周防別所の阿弥陀寺に施入した鉄製宝塔内の水晶製三角形五輪塔が地輪部と水輪部、空風輪部と火輪部をそれぞれ一つとして別々に造り、水輪部と火輪部の間に木製のほぞを設けて接合する事例があり(奈良国立博物館2006)、19と同様な構造をとる。また、宇治橋の架設を主導した西大寺僧の觀尊は般若寺にも関わりが深い。この系統は、重源、觀尊らとの関係が想定される。

系統3

表1の3・5～7・15・23～29・35は銅製、金銅製の五輪塔ないしは五輪塔形舍利容器・舍利塔などとして報告されているもの。

3は極楽寺境内の石製五輪塔(順忍塔)内に納置の金銅製五輪塔。総高19.0cm、地輪部の刻銘から延慶4(1311)没、順忍から授戒した尼僧・比丘尼禅忍の蔵骨器として知られる。

5は覺園寺の開山塔と称する石製宝篋印塔内に納置された金銅製五輪塔。総高10.0cm、地輪部に元亨3年(1323)の年紀刻銘がある。火輪下部に円筒を付け、水輪部に嵌め込む構造。

6・7は極楽寺塔頭、西方寺跡から出土。6は総高21.2cmの銀製、7は総高16.5cmの銅製で、ともに鍛造とされるが、構造を含め、詳細は不明。7は火輪部と地輪部の形態が6より扁平で古相とされる。6は3の極楽寺の五輪塔と似た形態である。6は火輪部と水輪部との間で分割される。

15は京都市左京区梶井町で発見された水晶製五輪塔形舍利容器の外容器として用いられた金銅製五輪塔。総高20.0cm、地輪部・水輪部、火輪部、空風輪部の3つに分割される。

23・24は額安寺奥院の五輪塔(忍性塔)の納置品。23は総高8.6cm、金銅製。24は総高6.8cm、金

銅製。構造は不明。

25～29は竹林寺五輪塔(忍性塔)納置の金銅製の五輪塔形蔵骨器と報告されるもの。25は総高6.9cm、陶製蔵骨器の追葬に伴う。薄い銅板を組み合わせた構造で、地輪部上面・側面は1枚の銅板で造り、底板はない。水輪部上面は火輪部と接合するため円筒を嵌め込み、下端は4つの突起で地輪部にかしめ留めする。水輪部に和紙に包まれた歯1個を納置。26は総高9.4cm、陶製蔵骨器の追葬に伴う(図8-4)。銅板を組み合わせて底板、角筒、上部板を接合して地輪部とする。水輪部上面に円筒の造り出しをもち、火輪部に差し込む。水輪部下端と地輪部上面を鋸で留める。火輪部は折り曲げて造り、受け板に蝋付けする。地輪部に骨片を納める。27は総高8.5cm、墓壇西南隅の追葬に伴う(図8-3)。地輪部の上下板を蝋付けする。水輪部中央に蝋付けの痕跡が見られる。水輪部と火輪部の間に別造りの円筒が嵌め込まれる。28は総高6.6cm、石櫃北辺部と東北部の頂部に追葬された塋室から出土(図8-2)。銅板の組み合わせで、地輪部の底板、角筒、上部板を接合する。水輪部上端で円筒の造り出しをもち、火輪部に差し込む。水輪部中央に蝋付けの痕跡が見られる。29は水輪部上端の円筒の造り出しを火輪部に差し込む。

35は胎蔵寺本尊の釈迦如来坐像胎内納置の五輪塔形舍利容器。総高7.3cm、金銀銅製。火輪部の反りが顕著で、火輪部から地輪部にかけて筒状の舍利容器を納める。空輪部下部から棒が延び、風輪部を貫いて蓋部とする。胎内納置の妙法蓮華經に貞和3年(1347)の年紀がある。

5・23～29・35は総高が10cm以下と小さく、3・6・7・15は10～20cmほどのやや大型のものとなる。5と15は不明であるが、実測図が公表されている25～29の竹林寺忍性墓納置品に見るように、銅板折り曲げや接合などによって造る地輪部と、上下を別鑄して蝋付けする水輪部が一つの五輪塔内で混合するなど、鑄造と細工からなる製作技術で造られている例が見受けられる。

系統3の形態は基本的には全体が整った五輪塔形である。基本的には水輪部を容器に見立てて舍利粒を納めるが、5や35は水輪内部に円筒状の舍利容器を別納する。総じて火輪部より上が蓋部となり、水輪部と火輪部の間で脱着できる構造となる。鎌倉周辺に法量が大きいものが、大和周辺に小さな精巧品が見られるのは、その製作工房が異なる可能性が示唆される。

竹林寺忍性墓納置品が13～14世紀、その他が14世紀に伴うものと位置づけられているが、25～29は竹林寺、3は極楽寺、23・24は額安寺といったように忍性と関わりが深い寺院の納置品である。真言律宗を広めた叡尊教団の信仰を具現化したものの一つが、この系統3の定型化した五輪塔であるものと理解される。

系統4

表1の1・12・13・30・34・36は水輪内部に舍利粒を納め、火輪部より上が蓋部となる構造の銅製、金銅製のもの。36の宮之内遺跡出土の舍利容器もこの系統に含む。総高は3～5cm前後と総じて小さく、定型化した系統3と異なり、五輪塔形としてはいびつで変則的な形態をもつ。

1は光福寺の元亨3年(1323)銘をもつ石製宝篋印塔の移築時に塔内から発見されたもの。2の銀製と他に水晶製五輪塔の発見も報じられるが、1の銅製のみが現存。総高は3.2cm、銅板の鍛造により地輪部・水輪部と空風輪部・火輪部を別々に造り、水輪部を身部とする。空風輪部を火輪部に通して円板形の留め金具でかしめ留めして固定する。碧玉製とみられる舍利10粒を納める。その

形態から14世紀前半の銘を伴う宝篋印塔より古相とされ、平安時代までさかのぼる可能性も指摘されるなど舍利容器の帰属年代は定見を見ない。13世紀に伴う可能性を想定しておく。

12・13は京都市東山区馬町に造立されていた2基の石製十三重塔のうち、永仁3年(1295)銘をもつ南塔に納置されていた金銅製の五輪塔。他に金銅仏、木造仏、銅製五鈷杵、水晶製五輪塔などがある。12は総高3.3cm、13は総高3.7cm(図8-6)。ともに青銅製で、12の空風輪下部に方形の段をもち、13の空輪部は上端部が尖るなどそれぞれ空風輪部が特異な形態をなす。13は空風輪・火輪部と、水輪・地輪部をそれぞれ一体で造り、鑄造の可能性が高い。水輪部に銀製円筒形舍利合子を納め、水輪部の側面に小孔を穿ち、舍利容器を覗き見るようになっている。12の構造ははっきりしないが、13と同様、火輪部より上が蓋部、水輪部が身部となる構造であろう。写真で観察する限りでは、12の水輪部中央付近に1条の接合痕跡が見られ、上下を別鑄で造り、接合した製作技法がうかがえる。

30は金峯山寺本堂の木造聖徳太子孝養像内から文永11年(1274)の奥書きをもつ経巻などとともに発見された有頸五輪塔。総高4.7cm、金銅製。地輪から風輪までの各部をそれぞれ銅板から造り、地輪部と水輪部は蟬付けし、壺形状の水輪部口縁に火輪部の底面を嵌め込んで接合する。水輪内部に舍利1粒を納める。五輪塔として古相な形態であり、聖徳太子像の年代である文永年間をさかのぼるものと想定されている。

34は光明寺に伝わる有頸五輪塔形舍利塔(図8-5)。総高6.45cm、金銅製。地輪部は銅板製の薄い方形壇で、内部に木製板を嵌め込む。火輪は銅板製で、空・風輪部は銅の鑄造とされる。水輪、火輪、風輪、空輪の各部は蟬付けで接合される。水輪部は有頸で、上下を別々に鍛造し、内部に総高2.2cmの銅製円筒形舍利容器を納める。水輪部の下に連座を設け、全体の形態は古相で宝塔と五輪塔の折衷様式とされる。照りをもたせた火輪部の屋根や、軸部と称すべき水輪部の形状から平安時代後期の作とされるが、塔身内の円筒形舍利容器の造形は鎌倉時代特有とされるなど、その帰属年代に検討の余地がある。

1は14世紀前半をさかのぼる可能性、34は12世紀後半を降る可能性もあるが、系統4は総じて13世紀頃に伴うものと考えられ、製作技術も鑄造と銅板折り曲げなどが併存するという特徴がある。いずれも地輪部と火輪部が扁平で、30と34は水輪上面に頸部をもつなどよく似た形態である。また、1と34は空風輪部の下部から棒が延び、火輪を通過させて蓋部とする点で共通する。

この系統は系統3とは異なる五輪塔形をなすが、製作技術や帰属年代は系統3と近いものと考えられる。また、34の光明寺の事例は系統2でみられた高度な装飾性を伴っており、系統2・3の製作技術の影響を受けつつ、別系統の五輪塔形舍利容器として五輪塔・舍利信仰の拡大と連動する形で各地に広がったものと想定される。

系統5

表1の4・8・10・20・22・33は鑄造で造られた銅製または金銅製のもの。火輪部以下を鑄造で一体として造り出し、火輪頂部に孔をもつものが多いが、分割して鑄造した可能性があるものも見受けられる。なお、4・8・10は実見の機会を得たので⁵⁾、観察所見も併せて付記する。

4は藤内定員(人物像は不明)の邸宅跡とされる小町1丁目309番5地点(周知の文化財包蔵地では

「若宮大路周辺遺跡群」に該当)第5方形竪穴建築址覆土から出土の銅製五輪塔(図8-7)。残存高2.5cm、火輪頂部から径4mm、深さ5mmの孔を穿ち、空風輪部が蓋になるものと考えられる。遺跡の消長は13世紀初頭～16世紀前半と長いが、報告書から読み取れる五輪塔の帰属年代は14世紀～15世紀初頭頃である。水輪下部の一部に湯口と考えられる痕跡が確認できる。地輪部と火輪部は各辺が平行せずズレがあり、火輪部と地輪部は別鑄である可能性が高い。

8は一の谷中世墳墓群遺跡出土(図8-8)。平安時代から江戸時代初期にかけての3,000基以上の塚墓、土墳墓、集石墓などの墳墓が密集し、五輪塔が出土した13号火葬遺構は1.57m×0.88mの楕円形を呈する土壇状の遺構である。五輪塔の他に、釘8点、多量の炭化物と少量の人骨が出土。遺跡内での火葬施設の年代は13世紀後半から14世紀代に位置づけられており、13号火葬遺構の帰属年代もこの範疇に収まるであろう。五輪塔は総高2.95cm、銅製。被熱痕はない。地輪部がやや扁平で水輪部が小さい形態をもつ。報告書の実測図には表現されていないが、いびつで扁平な空風輪部を確認できる。火輪部以下の器面を全体的に磨くが、地輪・水輪・火輪の各部の境までは及んでいない。火輪部以下を鑄造で造った可能性が高く、水輪部の一部に湯口の可能性がある器面の荒れが確認できた。火輪頂部に径2mmほどの孔があったと想定できる。

10は南山遺跡出土の五輪塔(図8-9)。南山遺跡の検出遺構は古代の掘立柱建物跡が中心で、中世の遺構は少ないが、土葬墓の可能性のある円形土坑がいくつか確認されており、遺跡からは14世紀の常滑焼大甕の出土も報告されている。五輪塔の出土状況は不明。現存高3.1cm、銅製。地輪部と火輪部の器高が8の一の谷中世墳墓群出土資料より若干高いが、水輪部は小さく、ほぼ同形態、同法量である。水輪部の一部に湯口らしきものが確認できる点、器面を丁寧に研磨するのも8と同様である。上部から見通すと、地輪部の一面が若干外側に張り出している。火輪頂部に深い孔がある。

20は般若寺十三重塔納置の五輪塔形舍利容器。総高5.7cm、金銅製。21とともに納置されており、帰属年代は建長5年(1253)である。

22は円成寺聖徳太子像内の五輪塔。総高3.5cm、金銅製。地輪・水輪・火輪と空風輪の各部をそれぞれ鑄造する。火輪頂部に舍利孔をもち、舍利2粒を納める。空風輪部の底面のほぞを火輪頂部の孔に差し込む構造。胎内の経巻に延慶2年(1309)の年紀銘がある。

33是那智山経塚出土。経塚と修法遺構からなる複合遺跡で、経塚に伴う遺物として仁平3年(1153)銘を最古とする平安期の経筒が、修法関係の遺物として仏像、懸仏、五輪塔、仏法具、玉、銭貨、陶器などが出土。33は総高3.0cm、金銅製。地輪部から火輪部まで一体での鑄造と報告されている。空風輪部が欠損するが、火輪頂部に孔が空いていること、ともに出土した総高6.2cmの滑石製五輪塔では火輪頂部から水輪部まで円筒状の孔を穿ち、風輪部にほぞを設けて栓とする構造であることから、33も同様な構造と推察され、孔に舍利粒を納めたものと考えられる。12世紀後半の時期が想定されている。

系統5は総高3cmほどの極小品と総高5cmほどの小さなものが見られ、法量としては系統4と共通する。全体的にずんぐりとしたものや火輪部が縦長となるものも見受けられるが、五輪塔形としては定型化している。また、4・8・10・33は遺跡出土品であり、また33は12世紀まで遡る一

方、8・14・22のような14世紀まで降るものもあり、13世紀代の様相が不明であるものの、鑄造による長期間の製作があったものと想定される。

(3) 金属製五輪塔形容器の消長とその背景

舍利容器には五輪塔形のみでなく、宝塔形、宝珠形、火焰形、宝篋印塔形など多様な形態があり、また五輪塔形といっても金属製に限らず水晶製、土製、陶製、木製などさまざまな材質のものがある。また、舍利塔、舍利瓶として知られるものもあり、これらを含めた総合的な検討が必要であるのは言うまでもない。極めて微視的な検討であるが、現時点で以下のとおり金属製の五輪塔形容器の分布、消長(図9・10)と製作背景を抽出できるのではないかと考える。

11～12世紀

系統1は畿内および周縁部に分布し、重源の五輪塔信仰の展開と関わりが深い。大法量で外容器としての性格が強く、地輪内部が箱となり舍利容器を納める構造の三角五輪塔が11～12世紀には出現し、13世紀に入ると見られなくなるようである。

また、系統5、那智山経塚出土の修法用具の一つとして鑄造した五輪塔が12世紀後半に出現し、後の14世紀に再び見られるようになる。

13世紀

系統2、水輪部を水晶などで造り、装飾性豊かな金工技術を伴う五輪塔が12世紀末頃から13世紀に畿内周辺で見られるようになるが、継続しない。また、系統3の定型化した五輪塔や、系統4の火輪部や地輪部が低い不定形な五輪塔はこの頃に出現するが、後者は14世紀には見られない可能性がある。

この時期には重源や叡尊らの五輪塔・舍利信仰の教線拡大に伴い、畿内を中心に広がりつつ、地方にも断続的にもたらされたものと考えられる。

14世紀

系統3が鎌倉周辺で見られるようになり、畿内を含めて叡尊教団に深い関わりをもつ寺院や石製塔に納置されるようになる。この頃になると、叡尊らと深く関係する西大寺系五輪塔が各地へ波及しており、金属製の五輪塔形舍利容器も連動するものと想定される。

また、系統5の鑄造で造り、火輪頂部に舍利孔をもつ小法量の五輪塔が新たに見られる。鎌倉時代には系統5と似た小法量の水晶製五輪塔形舍利容器もよく見られるようになる(柴田2024)。おそらく系統5にはさまざまな材質のものがあり、その出土・伝世例は寺院や石製塔に限らず多様であるものと想定されるが、今回取り上げた銅製の場合、遺跡からの出土事例が目を引く。4は人物像はともかく邸宅跡とされる遺跡の、物資集積のための施設と考えられる竪穴建築址(馬淵2004)、8は中世の火葬遺構、10は土坑墓が伴うと考えられる遺跡からの出土と、遺跡の性格に違いはあるが、金属製のものも必ずしも寺院や石製塔に伴わない特徴がある。

この段階には、小法量で火輪頂部に舍利孔をもつ水晶製、土製、木製の五輪塔形舍利容器も出現しているが、材質を限らなければ、これらが僧侶や有力者層の持物として所有された可能性が高く、各地に拡散したものと想定される。

(4) 金属製五輪塔形容器の製作

令制下における銅鑄物生産は、官営工房などとして律令社会に組み込まれ、在地社会においても官衙や寺院などに付属した。発掘調査事例に見るように鎌倉時代以後も各地で銅鑄物生産が確認されており、鑄造製の五輪塔形容器は地方でも製作が可能である。

実態が不明なものも多いが、製作技術から見ると系統1・2は鑄造と銀・銅板の折り曲げの技術が確認できる。また、系統3・4は鍛造とされるもの(実際には銅板折り曲げや蠟付けなど)、あるいは鑄造と銅板折り曲げが一個体の中で併存するものが見受けられる。系統5は鑄造によるが、蓋部は銅棒の研磨で造った可能性もあり、このように金属製五輪塔形容器の製作にあたっては鑄造のみでなく、銅板加工や研磨、鍍金、蠟付けやかしめ留めなどの接合といった技術が必要となる。特に系統2は彫金による高度な金工技術や装飾性を伴い、生産工房はかなり限定される可能性が高い。

中世の鑄造関係の職人として、鑄物師と細工(銀・銅)の存在が知られている。前者は鍋・釜などの鉄製煮炊具や梵鐘や鰐口などの銅鑄物を製作し、重源による鎌倉期の東大寺廬舎那仏の鑄造を担った河内系鑄物師の存在なども知られている。後者は仏具や建築にかかる装飾品を製作し(佐々木2002)、社寺祭祀に関わる小型で装飾性の高い銅鑄物を生産した職人で、鑄込み工程に留まらず、彫金や鍍金などもおこなったとも指摘されている(五十川1998)。京においては発掘調査によって11世紀後葉から14世紀前半までの銅細工に伴う工房跡の様相が判明している(村木2018)。

実際に金属製五輪塔形容器そのものや鑄型が工房遺跡から出土した例はなく、

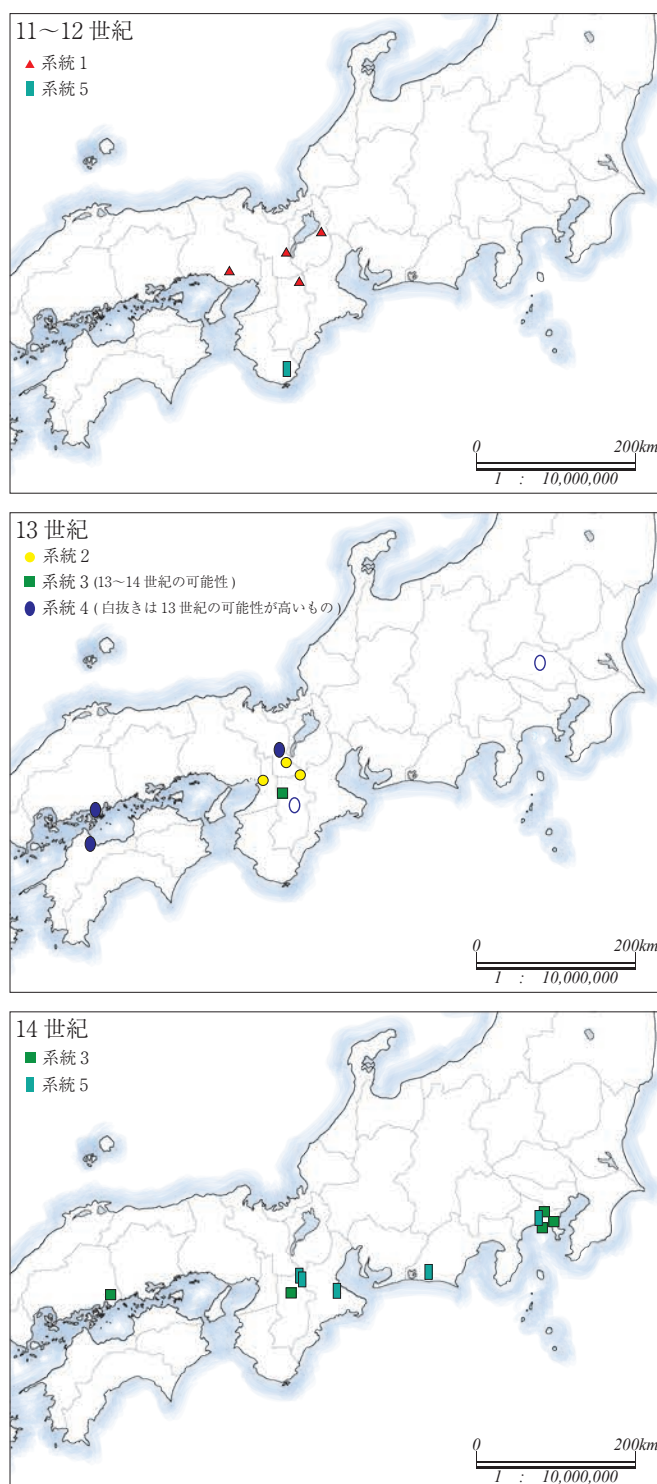


図9 金属製五輪塔形容器の時期別系統分布

	12 世紀	13 世紀	14 世紀	備 考
系統 1				重源・別所・三角五輪塔
系統 2				重源・叡尊等 装飾性高い、水輪部水晶
系統 3				叡尊・忍性 定型化した五輪塔
系統 4				重源・叡尊等 不定形な五輪塔、小法量
系統 5				小法量 同構造の水晶製等あり

図10 金属製五輪塔形容器の系統別消長図

具体的な工房の場所を求めるのは困難であるが、畿内周辺から西日本に分布するものは京を中心とした畿内で製作され、その量産化はなされていないものと想定される。

一方で、鎌倉をはじめ関東以東では13世紀以降の河内系鋳物師の影響下で成立としたされる鋳造工房が一定数知られており(村上2006)、例えば埼玉県の金井遺跡B区では13世紀後半から14世紀前半の鋳造関連遺構が確認され、鉄鍋を中心とした日常用具生産工房と、梵鐘や小仏像、水瓶などを鋳造した仏具生産工房のエリアから構成されるように(村木2014)、関東に分布するものはこれらの工房で製作されたものも多いと考えられる。

これ以外にも、伊勢湾沿岸にもまた異なる製作工房が存在した可能性が、系統5、8の一の谷中世墳墓群、10の南山遺跡出土の銅製五輪塔からうかがえる。両者は酷似し、10が8からの鋳型の改変によるものと想定されるが、同一工房の製作の可能性が高いものと判断される。一の谷中世墳墓群では蔵骨器として渥美・常滑・瀬戸産の甕・壺・鉢が多く搬入され、また南山遺跡においても常滑産の甕が出土するなど、伊勢湾の海上交通を介した物流が確認できる。系統5の生産は京や鎌倉、伊勢湾沿岸に限らず各地の鋳物師を伴う工房でなされていた可能性も想定される。

(5) 宮之内遺跡出土舍利容器の製作年代と製作地

宮之内遺跡出土舍利容器は13世紀には製作されていた可能性が高い。火輪部と地輪部が低く、平安時代後期の法勝寺軒丸瓦の五輪塔形紋の例に見るように五輪塔の形態として古相である(近藤1985・津々池1998)。瀬戸内に伝わり、12世紀に遡る可能性をもつ34の光明寺伝世の舍利容器と同様な形態的特徴をもつことから、12世紀後半から13世紀前半の年代幅の中で帰属年代を捉えてきた(松葉2024a・b)。加えて、容器となる水輪部分を上下別々に造り、蠟付けにより接合した技法は13世紀には系統3・4で出現しており、飛鳥寺塔跡出土の鎌倉初期とされる舍利容器はその好例である(石橋ほか2023)。現時点での宮之内遺跡出土舍利容器の製作年代は13世紀初頭頃を上限に想定できそう

	13 世紀		14 世紀	
	前 半	後 半	前 半	後 半
舍利容器の年代				
土師質土器の年代				
炭化物の年代				
等妙寺木造菩薩遊戲坐像 (伝如意輪観音) 胎内納置 木製五輪塔形舍利容器の年代				
馬場石製五輪塔納置 木製五輪塔形舍利容器の年代				

図11 舍利容器をめぐる年代

である。この舍利容器と同系統のものは13世紀代に畿内を中心に列島東西で点的な分布を示しており、13世紀初頭の可能性を念頭に置きつつ、13世紀の幅の中で製作年代を捉えておきたい。

舍利容器の具体的な製作地は不明であるが、同系統のものは法量が小さく、細工を伴う精緻な構造をもつものが多いという特徴がある。また、構造の共通性はあっても、その形態は多様なものが多いので、そもそも量産化されていない舍利容器と想定される。

在地で製作された可能性が全くないわけではないが、これまで指摘してきたとおり(松葉2024b)、中央仏師に伴う荘厳を担当する工房において高度な技術で製作されたものが、各地までもたらされたと推定される。

5 宮之内遺跡と周辺環境

(1) 舍利容器の製作年代と埋納年代との齟齬

宮之内遺跡出土舍利容器は13世紀代の製作年代が想定される一方で、舍利容器が出土した土坑51の上端から13世紀後半を上限年代とする土師質土器杯が出土した。また、舍利容器と共伴する炭化材の下限年代は13世紀末～14世紀末の暦年代を示す。以上から考えると、土坑に舍利容器が埋納された年代は13世紀後半以後の可能性が高いように思われる。

舍利容器の製作年代と土坑への埋納年代との間にタイムラグが生じるのは、舍利容器を入手した後、一定期間、信仰の対象として持物として所有され、最終的には土坑に埋納されたため、製作年代と埋納年代に時間差が生じたものと理解される。具体的には、①13世紀前半頃に舍利容器を入手し、13世紀後半～末頃に埋納した。②13世紀代に舍利容器を入手し、14世紀前葉に舍利容器を埋納した。③14世紀前葉に舍利容器を埋納し、近い時期に埋納した。と想定できる。

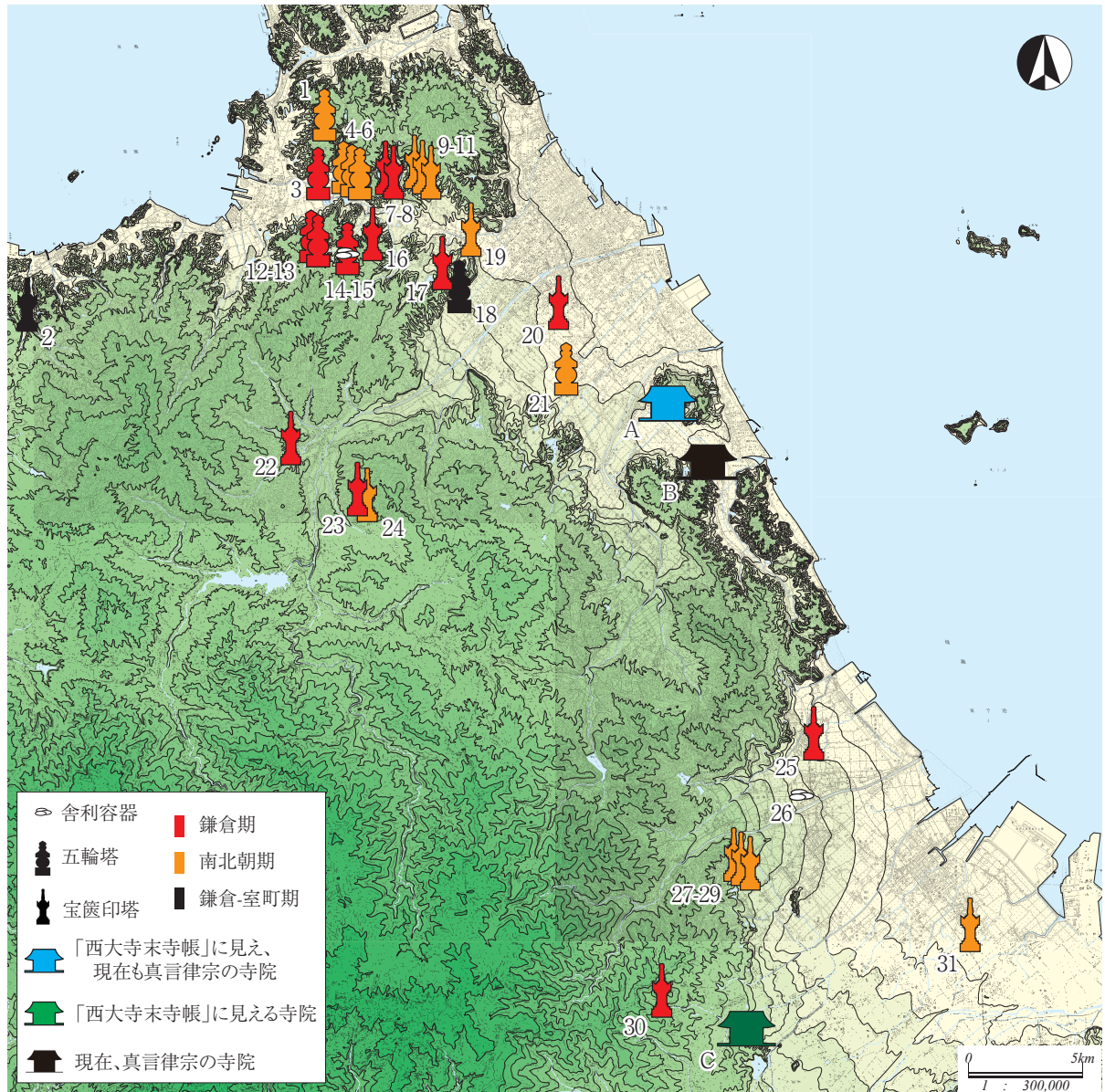
交14世紀の宮之内遺跡周辺の動向を確認すると、まず今治平野では14世紀前半、1323年から1326年の短期間に西大寺系五輪塔や越智式を含む宝篋印塔が集中的に造立された。伊予の豪族である越智氏出身の凝然は東大寺戒律院の高僧であったが、忍性とも交流が深く、もとより念心による瀬戸内沿岸での石塔造立に凝然が関係していたこと、今治平野で短期間に念心の石塔造立が集中したのは、忍性や凝然の死によってそれまで石塔造立に働いていた規制が弛緩し、一般層まで及んだことが指摘されている(山川2015)。周桑平野でも興隆寺宝篋印塔が鎌倉後期まで遡り、念心の作例と想定されている(十亀2011)。

また、明德2年(1391)に書き改められたとされる「西大寺末寺帳」には伊予国の本末寺として興法院と国分寺の名が見える(松尾1995)。興法院は所在を含めて実態が不明であるが、古田郷の久妙寺に弘法院が存在し、14世紀中葉に死去した僧侶名が史料に見え、14世紀前半には律院として活動したことがうかがえることから、これを興法院に充てる見解がある(松尾2019)。また、この頃には国分寺が真言律宗の寺院として再興していたことがうかがえる。叡尊教団の真言律宗の布教が13世紀後半から14世紀前半にかけての交14世紀に今治平野から道前平野北部の周桑平野にかけて及んでいたとみてよい。

中世、伊予国内の舍利容器の受容を確認すると、宇和郡・等妙寺の木造菩薩遊戲坐像(伝如意輪観音)胎内に納置された13世紀末～14世紀前半とされる木製八角形五輪塔形舍利容器の存在が

近年、判明した(楠井2022)。それ以外に、野間郡・馬場石製五輪塔に納置された14世紀前半とされる木製五輪塔形舍利容器の存在が知られる(藤村ほか1990)。14世紀前半には木製の舍利容器が伊予国で用いられ、石製塔や仏像胎内に納置されるようになったことがあきらかである。

伊予国内の西大寺本末寺は今治平野と周桑平野に知られるのみで、加えてこの地域では14世紀前葉に念心による五輪塔・宝篋印塔の造塔が進み、舍利容器を納めるという行為も認められるよ



- 1 中山神社 / 南北朝期 2 長谷 / 南北朝～室町期 3 乗禅寺 3号五輪塔 / 正中3年(1326) 4 乗禅寺 4号五輪塔 / 南北朝期
5 乗禅寺 2号五輪塔 / 南北朝期 6 乗禅寺 1号五輪塔 / 南北朝期 7 乗禅寺 5号宝篋印塔 / 正中3年(1326)
8 乗禅寺 3号宝篋印塔 / 元亨2年(1322) 9 乗禅寺 1号宝篋印塔 / 延文2年(1357) 10 乗禅寺 2号宝篋印塔 / 南北朝前期
11 乗禅寺 4号宝篋印塔 / 南北朝期 12-13 覚庵五輪塔 / 鎌倉後期 14 馬場五輪塔 / 嘉暦元年(1326)
15 馬場五輪塔内木製舍利容器 / 14世紀前半 16 長円寺跡 / 正中2年(1325) 17 野間神社 / 元亨2年(1322)
18 別名端谷 / 鎌倉～室町期 19 矢田 / 南北朝前期 20 附属寺 / 正和2年(1312) 21 新谷新出 / 南北朝期
22 宝蔵寺 / 鎌倉末期 23 光林寺 1号 / 鎌倉末期～南北朝初期頭 24 光林寺 2号 / 南北朝前期 25 供山寺跡 / 鎌倉期
26 宮之内遺跡 / 13世紀後半～14世紀 27-29 観念寺 / 南北朝期～室町初期 30 西山興隆寺 / 鎌倉後期
31 長福寺 / 南北朝期 A 国分寺 B 国分尼寺(法華寺) C 興法院(久妙寺弘法院カ)

図12 今治平野・周桑平野の五輪塔・宝篋印塔・舍利容器等分布図

うになる。一方で、今治平野では石製五輪塔の造立例が認められることに対して、周桑平野では宝篋印塔がみられるのみで、五輪塔の受容が低調である。

これらを踏まえて、宮之内遺跡に舍利容器がもたらされ、埋納された背景を考えると、伊予国内では中予、南予で13世紀中葉の石製五輪塔の作例が数例知られており、五輪塔を受容する素地は認められるので、この頃に製作された五輪塔形舍利容器が宮之内遺跡周辺にもたらされたことは想定できる。舍利容器の所有者は叡尊教団と近い関係にあり、個別に舍利容器を入手できる立場にあったものと理解される。念心の瀬戸内沿岸での石塔造立は14世紀に入ってからであり、東予東部域の西大寺本末寺の出現以前の、叡尊教団の教線拡大に先駆けて舍利容器が所有されたことで、後にこの地域に西大寺系五輪塔の造立や木製五輪塔形舍利容器の納置という動きに繋がっていったものと推察される。この背景には、宮之内遺跡がもとは皇室領であったという吉岡荘内にあったように、中央から直接的な文物を移入できる基盤があったことが考えられる。

反面、舍利容器の入手時期は13世紀であっても、その埋納は今治平野で石製五輪塔内に木製舍利容器が納置されたことと同様な事情が想定でき、先に示した可能性の②が実相に近いのではないかと考えられる。

(2) 宮之内遺跡の性格と舍利容器が埋納された環境

舍利容器の出土状況を整理すると、土坑底面付近の土層が変化する箇所から出土しており、かつその上部の埋土が同一で分層できないことを考えると、底面付近に布に包まれた舍利容器を埋納し、一括で埋め戻した後にその上部に何らかの構造物が存在した状況が想定される。例えば木製塔婆や石製塔が据えられた可能性などが想起される。また、土坑51の周囲に主だった遺構はなく、その北側から北方に向かって大型の方形・長方形・円形の土坑が分布するようになる⁶。

これらの土坑群の性格ははっきりしないが、宮之内遺跡の北～北西方に所在する実報寺高志田遺跡・旦之上遺跡2区などで検出された13～15世紀の土坑墓とよく似た規模、構造である(中野良一ほか編2005)。しかし、宮之内遺跡においては土坑内に副葬したと考えられるような良好な副葬遺物の出土事例には恵まれていない。この土坑が土葬墓である可能性は捨てきれないが、その付近の遺構分布が散在的であることを加味すれば、土坑の上にマウンド状の施設があり、さらに何らかの構造物が存在したあり方も考えていく必要がある。例えば、東京国立博物館所蔵「餓鬼草紙」第二段には追善供養のために木製塔婆の周囲に人が集まる様子が描かれ(https://emuseum.nich.go.jp/detail?&content_base_id=100152)、奈良国立博物館所蔵の餓鬼草紙(東京国立博物館本模写)第4紙の疾行餓鬼にはマウンド状や土壇状の高まりの上に立つ石製五輪塔や一石五輪塔、木製塔婆が描かれるなど(<https://imagedb.narahaku.go.jp/viewer.php?requestArtCd=0000012878>)、このような景観があった可能性も想定しておく必要がある⁷。

(3) 宮之内遺跡と社寺空間をめぐる環境

宮之内遺跡周辺における中世以後の社寺の動向を確認する。

社寺

宮之内遺跡から舍利容器が出土した要因の一つとして、中世には成立が確実視される宮内神社と神仏習合の形態をなす中世寺院がこの地に存在した可能性をこれまでに指摘した(松葉2024a・2024b)。しかし、その逸名寺院の存在を示す根拠は多くない。

宮之内遺跡周辺に中世寺院が存在した可能性については、文献史料に若干の記述がある。『庄内村誌』の実報寺の項に、同寺所蔵の総法務宮庁下文に実報寺の旧名が大明寺であったことが記されていること、大明寺は宮之内から長網、さらに現在地に移されたことが口碑で言い伝えられていること、長網にドウノモト、ドウショウという遺称地名が見られること、実報寺本堂の右側の像が大明寺本尊であったこと、などが概述されている。聖帝山実報寺は舒明天皇12年(640)、天皇の勅願により建立され、恵隠法師の開山と伝える真言宗御室派の寺院で、宮内神社から北西約1.2kmの距離にある。

舍利容器出土地にほど近い宮内神社は、『予陽旧蹟漫遊記』、『予州道前旧記』などに複数の創建・勧請譚が知られ、『予陽旧蹟漫遊記』には舒明行宮の古蹟で、舒明11年(639)、国司・乎致有興に勅して大三島大明神を勧請して三島新宮を称した、斉明崩御の際に幣帛勅願があった、貞観13年(871)6月の勅で津ノ宮大明神として祈雨祭を行った、などが記されている。实在資料としては文安6年(1449)8月の玉殿造立に伴う棟札があり、15世紀中葉には神社が存在した。社号も周敷宮内大明神、津宮周敷大明神、三島新宮、三島大明神、宮内大明神などがみられるが、伝わる棟札から寛文年間に宮内神社と改められている。

『庄内村誌』の宮内神社の項には、『予陽旧蹟漫遊記』の記事を取り上げて天平12年の勅で保安寺と実報寺が大別当として月交代で神社の管理を行ったこと、国司・伊予守の源寛王が神殿と神護寺を再建したこと、などが記述されている。

保安寺は、高鴨神社(旧小松町)近傍の清楽寺に併合された古寺として密厳寺とともにその名が知られるが、実報寺とともに宮内神社の別当と務めたという保安寺と同一かは不明である。宮内神社から北々東に約1.2km、奈良時代の建立と想定され、塔心礎が現存する道安寺跡とされる寺院である可能性も考えられる。

文献資料から考えると、国司が神護寺を再建した記事を見る限りでは宮内神社と神仏習合の形態を取りながら仏教寺院が神社近郊に所在したものと想定され、それが中世まで存在した可能性も十分考えられる。しかし、近世以後、現在に至るまで寺院が所在した痕跡は小字地名を含めて積極的に見出すことができない。

絵図・地図

舍利容器出土地周辺を描いた絵図として、桑村郡地図(地誌付)がある。インターネット上から愛媛県立図書館デジタルアーカイブ内で閲覧することができる絵図資料である。製作年不詳とされるが、宮之内村通路の東詰め、光明寺の前で縣道の丁字路となり、大明神川の左岸に沿って運輸道が描かれている。この縣道は孫兵衛作壬生川線にあたるものと考えられ、明治9年(1876)布告の太政官達第60号『道路ノ等級ヲ廢シ國道縣道里道ヲ定ム』に示された県道に該当するものと考えられることから、これ以後の絵図と推定される。この絵図には字・小字名と字境、道路等の路線と名称、河川・用水とその名称、社寺が描かれている。

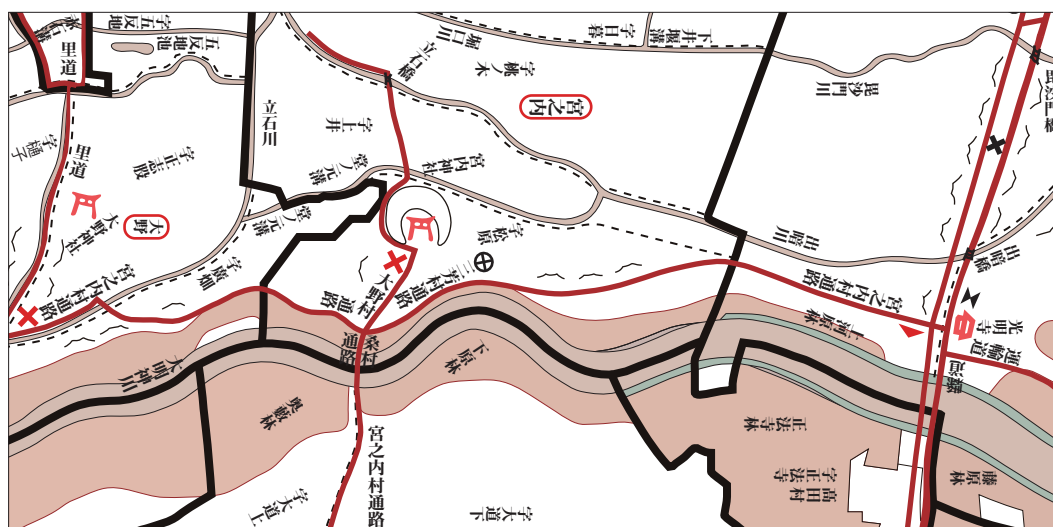


図13 桑村郡地図(地誌付)に描かれた宮之内遺跡周辺

図13にこの絵図をトレースしたものを示すが、宮内神社の社叢が描かれており、その北側に接するように流れる用水には堂ノ元溝という名称が付されている。明治年間発行の旧版地図にもこの用水路は描かれており、また幅は狭くなっているものと思われるが、現在も田畑に給水する用水路として現存している。

この地図の製作年代が明治9年以後とすれば、その描写には明治初期の廃仏毀釈の影響を受けていたことは十分に考えられる。『庄内村誌』の記述に従えば、宮内神社はこの時に別当寺からの管理から完全に独立したことが知られ、絵図そのものには相対的に寺院より神社が多く描かれているように、この宗教政策によって寺院の色合いがたいへん薄くなった状況が絵図からも読み取れる。そういった意味でも宮内神社の背後に寺院建物の存在を示す可能性がある堂ノ元という遺称名称が認められる点は重要である。中世以前にさかのぼる確証はないが、神社を管理していたとする別当寺の管理施設の存在も改めて想定されよう。

墓地

宮内神社の神門から北東へ約100mの地点に江戸時代以後の墓地が所在する。墓地全体の3/5以上の面積は昭和年間以後に造立された墓石で占められるが、江戸時代の墓石で占められる一角も認められる。墓参りに来られる地元の方々に聞き取り(雑談)をすると、宮之内地区だけでなく市外や県外の人の墓石もある、墓地を管理する寺院もいろいろある(複数の宗派がある)、寺院の墓地ではなく宮之内地区の墓地である、埋もれている古い墓石がまだある(現に地表面に露頭している墓石もある)、などの情報が得られた。確かに昭和年間以後の新しい墓地に整理されている現状もあるが、もともとは近世までさかのぼる古い墓地である。

現在は集落墓地の性格が強いかもしれないが、年紀銘をもつものを含めて近世墓石がまとまって分布する地点を確認できることから、宮之内遺跡周辺における近世段階の仏教信仰の動向を探る一手段として、墓地内の近世墓石を観察した。図14はドローンにより垂直写真を撮影し、既存の地形図に重ねて近世に属すると思われる墓石をプロットすることで墓石配置の略測図として作成したものである。当然、測量図としての精度は備えていない。

表2 宮之内墓地の墓石集計表

形 態	A地点		B地点		その他				不明	合計	江戸	明治
	江戸	明治	江戸	明治	江戸	明治	大正	昭和・平成				
光背形			1		5					6	6	0
舟形	11		4		4			6	1	26	19	0
方形	15	1	33	4	36	13		8		110	84	18
方柱形	5	1	14	2	16	33	13	42	3	129	35	36
竿付方形	5									5	5	0
竿付方柱形	6				4					10	10	0
地藏									1	1	0	0
石殿	1									1	1	0
宝塔	1							1		2	1	0
自然石	4		2							6	6	0
五輪塔								2		2	0	0
慰霊碑								5		5	0	0
合計	48	2	54	6	65	46	13	64	5	303	167	54

池上悟氏、村木量氏らの分類を参考に墓石の形態を、外形が光背状をなす「光背形」、外形が舟状をなす「舟形」、墓石の平面形が方形、外形が柱状をなす「方形」(頭部が弧状を呈する「櫛形」を含む)、墓石の平面形が正方形、外形が角柱をなす「方柱形」、方形の竿部の上に別材の笠をもつ「竿付方形」、方柱形の竿部の上に別材の笠をもつ「竿付方柱」、さらに「地藏、石殿、宝塔、自然石、五輪塔」に分類し(池上2003、朽木2004、三好2021)、基数を表2に示した。近世に伴うと考えられる墓石の位置は図14に示している。方形と方柱形には紛らわしいものもあり、頂部の形態で細分が可能であるが、今回は傾向を把握したのみである。

この墓地に所在する墓石数は303点、江戸時代167点、明治時代54点、大正時代13点、昭和・平成年間64点である(表2)。方形・方柱形の墓石が全体の4/5を占める。竿付方形の墓石は5基、竿付方柱形の墓石は10基と全体の5%ほどに過ぎないが、いずれも江戸時代に伴うものと考えられる。法量の傾向として大正時代以後の墓石は大型で、頂部が円頂・平頭をなす方柱形のものが圧倒的に多い。また、江戸～明治時代は頂部が円頂・弧状をなす方形や円頂をなす方柱形のものが多くを占めているが、江戸時代のは高さが40cm前後と小振りなものが中心で、正面に戒名銘、左面に年紀銘があるものがほとんどである。その中で竿付きの墓石がやや大型で、高さ1mほどのものが多い。墓石の石材は花崗岩が大半を占め、一部に凝灰岩質のものが認められる。

墓地内での墓石配置は、昭和年間以後に墓地の整理が行われており、大正時代以前の祖先や近親者に該当するとみられる墓石を墓地敷地内に集約する一方で、江戸時代の墓石が集中的に分布する範囲がA・Bの2地点で確認できる。A地点では正方位から27～29度ほど西偏する北西-南東方向に5列程度の分布が認められる。B地点では8列からなるが、西寄りの3列では正方位から20度ほど西偏する北西-南東方向に、東寄りの5列では同じく27度ほど西偏する北西-南東方向に墓石が並んでいる。この付近は、ある程度は江戸期の墓地景観を留めているものと考えられる。

年紀銘をもつ墓石について肉眼で年紀を判読できたものは表3のとおりである。今回は戒名、

その他の銘に関する観察はおこなっていない。最も古い墓石は宝永2年(1705)のものが2点ある。年記銘をもつ墓石を中心に墓地造立順序の傾向を概観すると、A地点では18世紀代のものが50%以上を占めるが、B地点では幕末期までの19世紀代のものが60%以上を占めており、A地点で先行して墓石の造立が進んだものと理解される。

A地点では、18世紀前半に中央やや北寄りで集中的な墓地造営があったようで、竿付きの墓石が大半を占めている。この付近には年記銘をもたない舟形・自然石の墓石も認められるが、これらは江戸時代を通じて存在することが三好義三氏によって指摘されており(三好2021)、造営開始期は17世紀代にさかのぼる可能性をもちながら、墓地の中心は墓地西端のA地点にあったものと考えられる。18世紀代後半に入ると、A地点では18世紀前半代の墓石周辺で新たな墓石の造立が、またB地点でも南側を中心に墓石の造立が進む。方形のものが多くを占め、笠付き墓石の造立は見られない。19世紀第1四半期には、A地点の東西寄りで新たに墓石の造立が始まり、B地点の北寄りで継続的な墓石の造立が進む。19世紀第2四半期には、A地点で周縁部や墓石の間に新たな墓石が見られるようになるが、B地点では東寄りで新たな墓石造立が進んでいく。

このように概観すると、18世紀前半の墓地造営の開始期は舟形や自然石、笠付きの墓石が中心

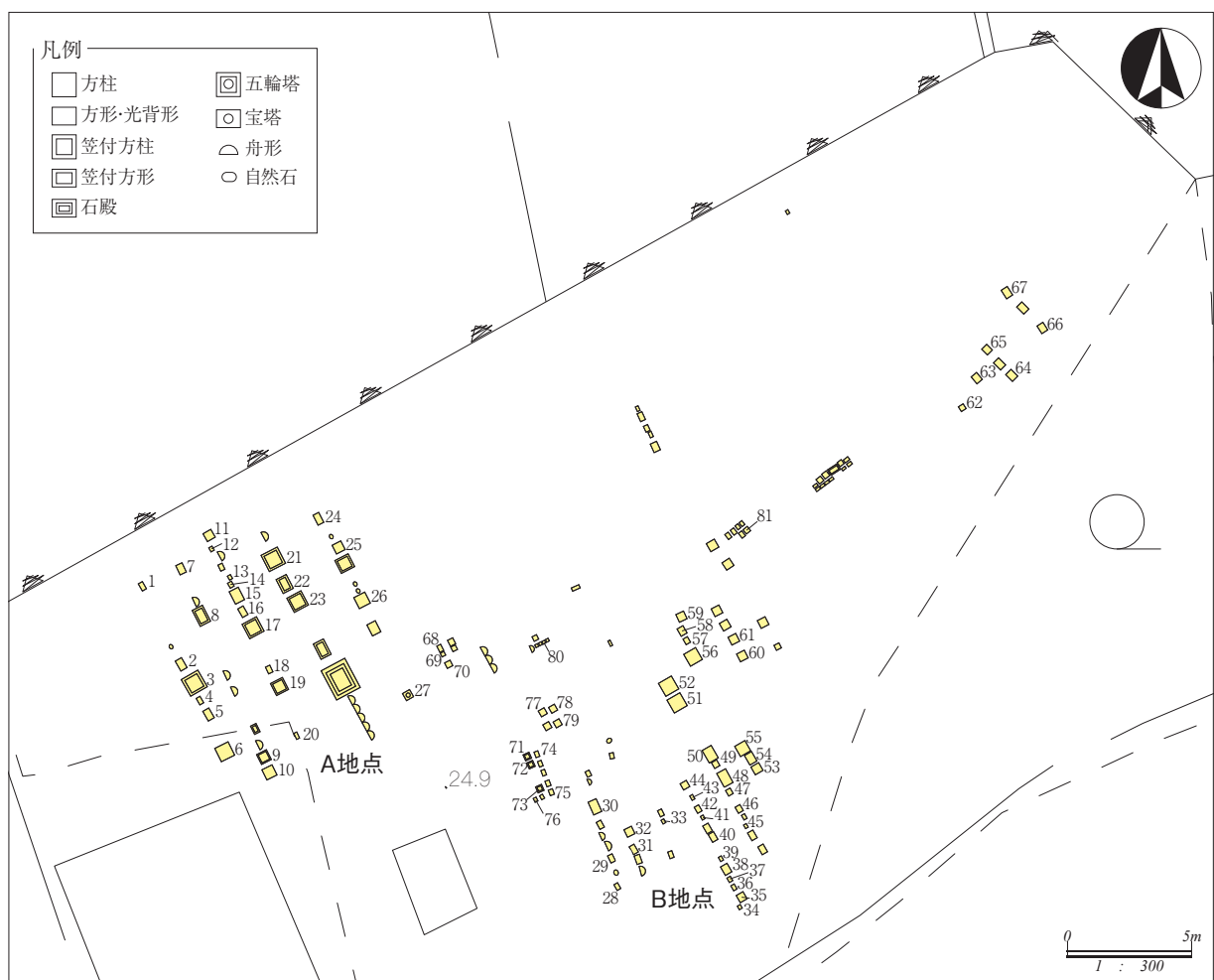


図14 宮之内墓地の近世墓石分布

表 3 宮之内墓地の近世墓石の記録年

	地点	形 態	年 紀	西 暦	備考
1	A	円頂方形	宝暦七年	1757	
2	A	尖頂方形	文化十年	1813	
3	A	笠付方柱	文化十年	1813	
4	A	円頂方形	安永八年	1779	
5	A	円頂方形	安永四年	1775	
6	A	平頂方柱	慶應元年	1865	
7	A	円頂方形	宝暦三年	1753	
8	A	笠付方形	享保十二年	1727	
9	A	笠付方柱	天保十四年	1843	
10	A	円頂方柱	文政十二年	1829	
11	A	円頂方柱	天保七年	1836	
12	A	円頂方形	慶應四年	1868	
13	A	円頂方形	文化三年	1806	倒置
14	A	円頂方形	文久二年	1863	
15	A	円頂方形	享保十九年	1734	
16	A	円頂方形	享保二十年	1735	
17	A	笠付方柱	宝永二年	1705	
18	A	円頂方形	宝暦十年	1760	
19	A	笠付方柱	寛延元年	1748	
20	A	円頂方形	宝暦七年	1757	
21	A	笠付方柱	寛延元年	1748	
22	A	笠付方形	宝永二年	1705	
23	A	笠付方柱	享保十年	1725	
24	A	円頂方形	文政六年	1823	
25	A	円頂方柱	享和二年	1802	
26	A	円頂方柱	文化四年	1807	
27	A	宝塔	天保十四年	1843	
28	B	円頂方形	寛政六年	1794	
29	B	円頂方形	宝暦十一年	1761	
30	B	円頂方柱	天保三年	1832	
31	B	円頂方形	文政七年	1824	
32	B	円頂方柱	文化十二年	1815	
33	B	円頂方形	文化十二年	1815	
34	B	円頂方形	宝暦二年カ	1752	
35	B	円頂方柱	文政十三年	1830	
36	B	円頂方形	安永□	1772-1781	
37	B	円頂方形	安永六年	1777	

	地点	形 態	年 紀	西 暦	備考
42	B	円頂方形	宝暦十一年	1761	
43	B	円頂方形	安政□	1855-1860	
44	B	円頂方形	文政十年	1827	
45	B	円頂方形	寛政□	1789-1801	
46	B	円頂方形	享保子子(五年)	1720	
47	B	円頂方形	安政□	1855-1860	
48	B	円頂方形	文政六年	1823	
49	B	円頂方形	文化八年	1811	
50	B	円頂方形	文政元年	1818	
51	B	突頂方柱	文政十年	1827	
52	B	突頂方柱	文化六年	1809	
53	B	円頂方柱	天保三年	1832	
54	B	円頂方形	天保二年	1831	
55	B	円頂方柱	文久元年	1862	
56	B	円頂方柱	安永四年	1775	
57	B	円頂方形	文久二年	1863	
58	B	円頂方形	天保十一年	1840	
59	B	円頂方形	文久二年	1863	
60	B	円頂方柱	延享三年	1746	
61	B	円頂方柱	享保十二年	1727	
62	その他	円頂方柱	文久二年	1863	
63	その他	円頂方形	文化十年	1813	
64	その他	円頂方形	文化八年	1811	
65	その他	円頂方形	寛政二年	1790	
66	その他	円頂方形	文政七年	1824	
67	その他	円頂方形	享和三年	1803	
68	その他	円頂方形	文政六年	1823	
69	その他	円頂方柱	文政四年	1821	
70	その他	円頂方柱	慶應三年	1867	
71	その他	笠付方柱	天保十三年	1842	
72	その他	笠付方柱	天明六年	1786	
73	その他	笠付方柱	天保十三年	1842	
74	その他	円頂方形	享保十二年	1727	
75	その他	円頂方形	文化七年	1810	
76	その他	円頂方形	享保三年	1718	
77	その他	円頂方形	文化四年	1807	
78	その他	円頂方柱	寛政五年	1793	

であったと考えられるが、18世紀後半には方形の墓石が主体となり、前段階の墓地を拡張する形で墓地の造営が進む。19世紀にはさらに墓地の拡張があり、方柱形の墓石も認められるようになる。A・B地点で共通する



宮内神社北東の石製五輪塔



宮内神社社叢北東隅の水輪石状の大石

写真4 宮内神社周辺の石製五輪塔

るのは、時期を経るごとに新たな列に墓地造営を拡大させていることであり、おそらくすでに失われたA・B地点以外の江戸時代の墓地にも同様な傾向があり、墓地全体を見れば西側から墓地列が形成されていったのではないかと推察される。

18世紀前半から中頃には全国的に石製墓標の造立が急増し、庶民層まで広がるとされ、また19世紀初頭から前半における方柱形の出現は個人的な墓標が家族的なものに変化するものと位置付けられている(三好2021)。このような近世墓標の画期は宮之内墓地にも認められ、全国的な近世墓石の造立の流れの中で理解できる。

現在は地域の共同墓地としての色合いが強い宮之内墓地であるが、江戸時代においては全国的な近世墓地のあり方と共通しており、寺院による一定の関与があったと考えることが合理的である。幕府の仏教政策として、17世紀後半の寛文年間には一家一寺制を中心とする檀家制度が整え始められたと理解されており(秋池2010)、宮内神社により近い墓地の西側に優位性や时期的な先行性が認められることから、周辺に寺院施設が存在した可能性も考えられる。

17世紀以前の墓地は判然としない。宮内神社本殿から約100m北東の地点には16世紀に伴う石製五輪塔の地輪・水輪・空風輪の各部が瓦製祠と一緒に集積されている(写真4左)。また、宮内神社社叢の北東隅付近には一見、水輪部と見受けられる大石が台石の上にセメントで固定されているなど(写真4右)⁸⁾、宮内神社の北側に中世から17世紀における墓地が埋もれている可能性を想定しておく必要がある。

おわりに

本稿では、宮之内遺跡出土舍利容器を紹介し、現時点での理解を示した。当地にこの舍利容器がもたらされた背景に、叡尊教団の五輪塔・舍利信仰をいち早く取り入れた存在を想定し、その背景に遺跡周辺に中世の逸名仏教寺院の存在や吉岡荘との関わりがあったことを想定したが、あきらかにできたことは多くない。

舍利容器の発見当時、多くの学識者の方々からご指導、ご教示を賜ってきた中で、久保智康氏から「このような舍利容器を出土する遺跡ですから、遺跡内に寺院が存在した可能性が高く、その宗派、教理にまで考察を及ぼさないと最終的な意義づけは完了しないでしょう。(中略)遺跡だけでなく周辺の寺社を含めた宗教環境を総合的に把握することが大事です。」という、現時点でも未解決の課題を端的に指摘された。現地も舍利容器も実見されたいと氏が希望される中、2024

年6月9日、急逝され、突然の訃報に接することとなった。筆者は福井県在職時から多くをご指導
いただいております、この場に相応しくないかも知れないが、心よりご冥福をお祈りし、氏からの宿
題に向き合うことがご恩返しになるものと念じ、今後も調査研究を進めたい。

最後に、本稿には(公財)愛媛県埋蔵文化財センターが保有する調査図面・写真等を使用させて
いただくとともに、センターの諸先輩、同僚の方々にご指導・ご教示を賜りました。

資料調査、類例探索、文献入手および本稿の執筆、図表作成において、以下の機関、個人のご
指導、ご協力を賜りました(敬称略)。記して感謝申し上げます。

磐田市教育委員会、鎌倉市教育委員会、(株)パレオ・ラボ、(公財)元興寺文化財研究所、西条市
教育委員会、松阪市教育委員会、青木聡志、岡島俊也、岡田一郎、尾崎誠、久保智康、古田土俊
一、狭川真一、柴田圭子、神野恵、鈴木圭、鈴木弘太、鈴木康大、首藤久士、田中いづみ、辻本
裕也、乗松真也、初村武寛、韓希姫、東村純子、前園實知雄、水澤幸一、村田匡、山岡奈美恵、
山口繁生、渡邊芳貴

註

- *1 出土土器の年代観については、柴田圭子氏、首藤久士氏、青木聡志氏のご教示を賜った。細片資料でもあ
り、また東予西部地域における既存の土師質土器編年に明確に適合させることが困難な法量、形態であるが、
柴田氏が示した編年(柴田2020)の土師質土器(在地)杯A(2)の5aが近く、上限の時期を13世紀中葉～14世紀初頭頃
と理解するに留めておきたい。
- *2 煩雑となるため、蛍光X線スペクトルは示さない。蛍光X線分析の結果は発掘調査報告書に収録予定である。
- *3 容器外付着の繊維片については、東村純子氏に多くをご教示いただいた。
- *4 表1の名称や法量、材質等は出典文献掲載の情報に準拠したが、名称に関しては筆者の判断で変更したもの
がある。また、構造、製作技術まで踏み込んだ記述があるものは限られるため、不明な点が多いことを断ってお
く。表1に出典文献を掲げ、本文の明示は割愛した。
- *5 資料調査においては、鎌倉市教育委員会、磐田市教育委員会、松阪市教育委員会のご高配を賜った。
- *6 令和6年度の宮之内遺跡の発掘調査において、6a区の東隣の6b区中世後期面からやはり大型の土坑群が検出さ
れており、また北隣の7区の中世前期面でも散在的ではあるが、同様な土坑群が検出されている。
- *7 狭川真一氏のご教示による。
- *8 石製五輪塔の年代観は狭川真一氏のご教示による。また、写真4右の水輪部のような大石は五輪塔の水輪石で
はない可能性を狭川氏から指摘されており、自然石の可能性もあるが、情報として本稿に記載しておく。

参考文献

- 秋池武2010「終章 墓石の歴史」『近世の墓と石材流通』高志書院
- 池上悟2003「近世墓石の諸相」『立正大学人文科学研究所年報』40集 立正大学人文科学研究所
- 石橋茂登・諫早直人・村田泰輔・星野安治・田村朋美・三田覚之2023「飛鳥寺塔跡出土舍利容器」『奈良文化財
研究所紀要2023』奈良文化財研究所
- 五十川伸矢1998「銅関連鑄造遺跡 鑄造遺跡からみた古代・中世の銅鑄物生産」『季刊考古学第62号 古代・中
世の銅生産』雄山閣出版
- 五十川伸矢2006「中世の鑄物生産と地域性」『新領域創生研究部門A01-2 日本中世における銅鉄の金属生産とそ

- の流通に関する研究 シンポジウム 中世日本の鋳物生産 -日本列島の西と東-』五十川伸矢
 元興寺文化財研究所1995『五輪塔の研究 -平成六年度調査概要報告-』
 京都国立博物館2010『高僧と袈裟』
 楠井隆志2022『等妙寺菩薩遊戲坐像から発見された木製八角五輪塔と舍利』鬼北町教育委員会
 朽木量2004「第1部 宇陀・都祁地域における中・近世墓地の調査 第1章 調査・研究の目的と経緯 第2節 調査の方法」『国立歴史民俗博物館研究報告第111集 大和における中・近世墓地の調査』白石太一郎・村木二郎編 国立歴史民俗博物館
 近藤喬一1985『教育社歴史新書 日本史40 瓦からみた平安京』ニュートンプレス
 西予市教育委員会2020『西予市埋蔵文化財発掘調査報告書5 市内遺跡試掘調査報告書』
 佐々木稔2002『鉄と銅の生産の歴史 -金・銀・鉛も含めて- 増補改訂版』雄山閣出版
 沢田むつ代2004「上代裂の技法と文様の変遷」『繊維と工業』60巻10号 社団法人繊維学会
 柴田圭子2020「第11章 まとめ 第4節 古谷地区における古代～中世遺跡について」『発掘調査報告書第199集 古谷尾ノ端遺跡・古谷仙田岡遺跡・古谷横枕遺跡・古谷立丁遺跡・古谷高木遺跡・古谷坪ノ内遺跡・古谷シヨクガ谷遺跡発掘調査報告書』公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
 柴田圭子2024「湯築城跡出土の水晶製五輪塔形舍利容器について」『紀要愛媛』第20号 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
 鈴木実雄・穂月敬吾1956「第十九章 宗教」『庄内村誌』庄内村誌編纂委員会編 庄内公民館
 津々池惣一1998「平安時代後期の瓦 -六勝寺を中心とする仏教瓦等の性格について-」『研究紀要』4 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所
 十亀幸雄2011「伊予興隆寺宝篋印塔と近江式文様」『遺跡』45号 遺跡発行会
 十亀幸雄2012「伊予における鎌倉後期の石工念心の石塔を訪れて(上)」『遺跡』46号 遺跡発行会
 中野良一ほか編2005『長網Ⅰ遺跡・長網Ⅱ遺跡・実報寺高志田遺跡・福成寺遺跡・旦之上遺跡 -東予玉川線地域活性化道路緊急整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-』財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
 長井数秋・田井野道隆・今井宏2008「周桑平野の中世宝篋印塔」『ふたな』4号 愛媛考古学研究所
 長井数秋2010「今治市地方側の中世並びに中世様式の宝篋印塔」『ふたな』8号 愛媛考古学研究所
 長井数秋・田井野道隆・今井宏2010「西条市内の中世並びに中世様式の宝篋印塔」『ふたな』8号 愛媛考古学研究所
 藤澤典彦2002「重源と三角五輪塔の周辺」『重源のみた中世 -中世前半期の特質-』シンポジウム「重源のみた中世」実行委員会
 藤村啓修ほか1990「第三章 調査事項 第四節 納入遺物及び地下調査」『重要文化財 野間五輪塔(三基)保存修理工事報告書』財団法人文化財建造物保存技術協会編 今治市
 馬淵和雄2004「六 叡尊・忍性教団の考古学」『持戒の聖者 叡尊・忍性』松尾剛次編 吉川弘文館
 松尾剛次1995「第五章 西大寺末寺帳考」『勧進と破戒の中世史 -中世仏教の実相-』吉川弘文館
 松尾剛次2019「第五章 伊予・讃岐両国における展開」『鎌倉新仏教論と叡尊教団』法蔵館
 村上伸二2006「中世前半東国の鋳造工房」『新領域創生研究部門A01-2 日本中世における銅鉄の金属生産とその流通に関する研究 シンポジウム 中世日本の鋳物生産 -日本列島の西と東-』五十川伸矢
 村木二郎2014「中世鋳造遺跡からみた鉄鍋生産」『考古学の中世史研究11 金属の中世 -資源と流通-』小野正敏・五味文彦・萩原三雄編 高志書院
 村木二郎2018「中世京都七条町・八条院町界隈における生産活動 銅細工を中心として」『国立歴史民俗博物館

研究報告第210集 [共同研究] 中世の技術と職人に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館
山川均2015「第Ⅶ章 野間周辺石塔群と凝然」『石塔造立』法蔵館
山内譲1986「安楽寿院領桑村郡吉岡荘について」『伊予史談』261号 伊予史談会
海邊博史2012「四国」「付編 五輪塔・宝篋印塔都道府県別分布図・一覧表 愛媛県」『中世石塔の考古学 -五輪
塔・宝篋印塔の形式・編年と分布-』狭川真一・松井一明編 高志書院
その他、表1出典に掲げた以下の文献も適宜、参照した。

表1出典

文献1：恩賜京都博物館1949『舍利容器と鎮壇具展目録』
文献2：鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館1971『鎌倉の中世出土遺物 鎌倉国宝館図録(18)』
文献3：文化庁・東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館1972『日本の美術』第77号 塔 塔婆・スツ
ーパ
文献4：奈良国立博物館1975『仏舎利の美術目録』
文献5：鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館1977『鎌倉の五輪塔 鎌倉国宝館図録(21)』
文献6：松阪市教育委員会1979『南山遺跡発掘調査概報Ⅰ』
文献7：東松山市教育委員会1980『光福寺宝篋印塔』
文献8：松阪市教育委員会1980『松阪市埋蔵文化財報告3 南山遺跡発掘調査報告』
文献9：森田利吉ほか1980「文化の部 12 経塚遺物と土呂路町出土品等 3 土呂路町南山遺跡出土品と乙部町の平安
仏」『松阪市史』第三巻 史料篇 古代・中世 松阪市史編さん委員会編 松阪市
文献10：奈良国立博物館1983『仏舎利の荘厳』
文献11：(推定)藤内定員邸跡発掘調査団1983『小町1丁目309番5地点発掘調査報告 -松風堂ビル建設に伴う中世遺
跡(推定藤内定員邸跡)の発掘調査報告書-』
文献12：斎木秀雄1983「伝藤内定員邸跡出土の銅製小型五輪塔」『鎌倉考古』No.17 鎌倉考古学研究所
文献13：東京国立博物館1985『那智経塚遺宝』
文献14：文化庁・東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館1989『日本の美術』第280号 仏舎利と経
の荘厳
文献15：磐田市教育委員会1993『一の谷中世墳墓群遺跡 本文編』
文献16：元興寺文化財研究所1995『五輪塔の研究 -平成六年度調査概要報告-』
文献17：奈良国立博物館2001『仏舎利と宝珠 -釈迦を慕う心-』
文献18：奈良国立博物館2006『大勧進 重源 東大寺の鎌倉復興と新たな美の創出』
文献19：内藤栄2008「三角五輪塔の起源と安祥寺毘盧遮那五輪率塔婆」『美術史論集』8 神戸大学美術史研究
会
文献19：神奈川県立歴史博物館2012『世界遺産登録推進三館連携特別展 武家の古都・鎌倉』
文献20：石田茂作2016『日本仏塔の研究』・『日本仏塔の研究 図版編』
文献21：奈良国立博物館2016『忍性 -救済に捧げた生涯-』
文献22：唐招提寺・奈良県立橿原考古学研究所・(公財)由良大和古代文化研究協会2023『奈良県文化財調査報告
書第194集 竹林寺忍性墓』
文献23：松葉竜司2024a「Ⅰ 発掘調査と整理作業 B.宮之内遺跡」『愛比売 2023(令和5)年度年報』公益財団法人
愛媛県埋蔵文化財センター

文献24：松葉竜司2024b「考古フォーカス 愛媛県西条市宮之内遺跡の発掘調査」『考古学研究』282号(第71巻第2号) 考古学研究会

URL1：松熊山胎蔵寺ホームページ(<https://www.taizoji.com/%E8%83%8E%E5%86%85%E6%96%BD%E5%85%A5%E5%93%81%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6/>)

挿図表等出典

図1：MAPIO/Royalty Free Digital Maps ©NijiX、愛媛県埋蔵文化財センター提供図をもとに筆者作成。

図2・3：公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センターが保有する測量図・写真等を使用し、筆者作成。

図4：1-3は筆者実測・トレース図をもとに、4は委託業務報告書を転載の上、筆者作成。

図5：委託業務の成果である初村武寛氏作成の実測図を筆者がトレースして作成。

図6：公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター 田中いづみ氏が3DCGソフトBlenderで作成したものを使用。

図7：関係文献をもとに筆者作成。

図8：表1-文献9～11・15・22に収録の実測図を転載の上、筆者作成。

図9-11：筆者作成。

図12：元興寺文化財研究所1995、海邊博史2012、十亀2011・2012、長井ほか2008・2010、長井2010、愛媛県教育委員会ホームページ(<https://ehime-c.esnet.ed.jp/#gsc.tab=0>)、石仏と石塔(<https://kawai24.sakura.ne.jp/index-1.htm>)をもとに筆者作成。

図13：愛媛県立図書館デジタルアーカイブ 桑村郡地図(地誌付) (<https://adeac.jp/ehime-pref-lib/viewer/mp000180/MM-018/>)を下図としてトレースの上、筆者作成。

図14：西条市ホームページからダウンロードした西条市都市計画図を再トレースしたものを下図に筆者作成。

表1：関係文献をもとに筆者作成(表中に出典文献を明示)。

表2-3：筆者作成。

写真1-3：委託業務報告書をもとに筆者作成。

写真4：筆者撮影。

(2025年3月14日)